

# 学院史料

2026. 4. Vol. 39.

神戸女学院史料室

# 学 院 史 料

2026. 4.

Vol. 39

---

## 神戸女学院創立150周年特集

### 創立150周年に寄せて

#### 創立150周年記念号に寄せて

—第1回卒業生 金森小寿姉(1864-1912)のこと— …… 飯 謙(1)

#### 創立150周年に寄せて—変動の時代における学院の使命と展望—

…… 中野 敬一(5)

創立150周年に寄せて …… 森谷 典史(7)

#### 神戸女学院創立150周年に寄せて—Ask what we can do for Kobe College—

…… 米津 博子(9)

創立150周年記念プログラムの取組と成果 …… 北條 敦子(11)

神をたたえよ 音高らかに …… なかにしあかね(13)

150年の時を超えて—英語教育と国際学部の継承 …… 白井由美子(17)

神戸女学院創立150周年をおぼえて …… 藏中さやか(19)

150周年のお祝いと感謝 …… 石谷 真一(21)

創立百五十周年によせて …… 横田 弘文(23)

創立150周年記念事業 …… 佐伯裕加恵(25)

#### 神戸女学院創立150周年記念式典

##### アメリカからの来客

##### 神戸女学院創立150周年教職員礼拝

##### 神戸女学院創立150周年記念展示III

「Bridging Generations—神戸女学院の150年と織りなす未来—」

##### 神戸女学院創立150周年創立者記念日礼拝(神戸教会)

##### 神戸女学院・日本聖書協会創立150周年記念講演会

「近代日本の文化形成と未来へのまなざし—聖書翻訳の貢献」

##### 神戸女学院創立150周年記念めぐみ寄付講座(大学)・めぐみ寄付講演会(中高部)

##### 神戸女学院創立150周年特別記念礼拝

##### 神戸女学院創立150周年記念めぐみ講演会 森山良子コンサート

##### 神戸女学院創立150周年記念募金事業

##### 小林季子記念館

##### 150周年記念出版

# GAKUIN SHIRYO

2026. 4.

Vol. 39

---

## The 150<sup>th</sup> Anniversary of Kobe College

### Message for the 150<sup>th</sup> Anniversary of Kobe College

KANAMORI-NISHIYAMA Kohisa (1864-1912), Our First Graduate..... II Ken(1)

150th Anniversary Reflections – Mission and Vision in a Time of Change –

..... NAKANO Keiichi(5)

Message for the 150th Anniversary.....MORITANI Norihisa(7)

Ask What We Can Do for Kobe College ..... YONEZU Hiroko(9)

Initiatives and Achievements of the 150th Anniversary Program

..... HOJO Atsuko(11)

Praise God, Loudly ..... NAKANISHI Akane(13)

Across One Hundred and Fifty Years : The Legacy of English Education

and the School of International Studies ..... SHIRAI Yumiko(17)

Reflections on the 150th Anniversary ..... KURANAKA Sayaka(19)

150th Anniversary Celebrations and Gratitude ..... ISHITANI Shinichi(21)

A Message for the 150th Anniversary of Kobe College..... YOKOTA Hirofumi(23)

The 150<sup>th</sup> Anniversary Commemorative Project of Kobe College ..... SAEKI Yukae(25)

Commemorative Ceremony

Guests from America

Staff Chapel Service

Commemorative Exhibition III

Founder's Day Service

Memorial Lecture

Commemorative "Megumi" Endowed Course and Lecture

Special Memorial Service

Commemorative "Megumi" Concert

Commemorative Fundraising Project

KOBAYASHI Sueko Memorial Hall

Commemorative Publication

## 創立150周年記念号に寄せて

——第1回卒業生 金森小寿姉（1864-1912）のこと——

院長 飯 謙

神戸女学院は1875年10月12日に創立された。神の支えと多くの人の祈りと参与を得て150年間を導かれた。この歴史を振り返り、本学院が今日も教育の業を続けられていることは、個々人の努力の積み重ねを超えた、神の出来事として性格づけられると感じられた。その意味でも、『学院史料』第39号が創立150周年記念式を報告し、記録にとどめてくれることは、感謝に覚える。

さて創立150周年記念式は2025年10月12日に挙行された。第1部と第2部の間に内閣総理大臣の石破茂氏からいただいたビデオ・メッセージが映写されるとのアナウンスが伝えられると、会場にどよめきが起こった。石破氏のお言葉は6分ほどのものであったが、冒頭の三分の一ほどを、本学院の卒業生であり、ご自身の母方の曾祖母である金森（旧姓・西山）小寿、同じく祖母の金森（旧姓・原田）花の紹介にあてられた。お二人のことは、記念式に列席した少なからぬ人にとって初めての情報であったと想像される。本稿では金森小寿について簡潔に述べ、その人となりを共有したい。

小寿は1864（元治元）年8月生まれ<sup>①</sup>。出身は岡山の青江（現在の岡山市北区青江）である。教会学校に通って大西絹の指導を受け、後に夫となる金森通倫から受洗<sup>②</sup>。1879年4月から翌年5月まで「米人ウイルソン氏、同ケリー氏ニ従ヒ英語學修行」<sup>③</sup>。ウイルソン氏とは看護師であるアメリカンボード宣教師のジュリア・ウイルソン、ケリー氏は同じくアメリカンボードの宣教師で神戸女学院最初の理事長を務めたオーティス・ケーリ（1851-1932）の夫人エレンを指すと思われる。小寿が英語を学んだという期間は、ウイルソンの岡山在任の時期と重なる。ウイルソンは1877年に来日し、1879年に岡山に赴任したが、体調が思わ

しくなく、1880年に離任している。結果として、タルカットは彼女の後任として岡山に赴任したことになる。女学校の初代校長であるイライザ・タルカットは1880年4月に岡山を訪れ、その地に生まれていたキリスト者のコミュニティと親しい交流をもったことを自ら報告している<sup>④</sup>。ここからもアメリカンボードの宣教師グループが当地の人々と相互信頼の関係で結ばれていたことが窺える。

恐らくウイルソンとケーリ、そしてタルカットの推薦があったからであろう、小寿は1880年5月に神戸へ移り、その秋に5年制の中等教育を開始した神戸英和女学校に入学する。1882年12月に英和女学校を第1回生として卒業しているので、小寿は同校の第4年次に編入したことになる。入学時の小寿は15歳であった。英和女学校発足時に第4年次生となるのは「女学校」創立当初の1875年に入学した生徒であったから、小寿は同等の力量があると認められたことになる。

周知のように、本学院における中等教育は、1879年の第2代校長ヴァージニア・クラークソンによるカリキュラム改革と校名変更（神戸英和女学校）に伴い、1880年秋に開始された。女学校の開校時には特段の入学要件はなかったが、改称後の英和女学校では小学校卒業を条件とした。小寿は1864年の生まれであるから維新政府による「学制」開始時には学齢に達していたはずであり、小学校は卒業したと考えられる。彼女は後にキリスト者となる小野田元（1857-1941）の薫陶を受けたことが伝えられる。この人は岡山師範学校を卒業した小学校教師で、小寿は小野田の「教え子」と紹介されているので<sup>⑤</sup>、彼が教鞭を執る学校に通っていたのだろう。また幼少期から教会学校に通い、大西絹の指導を受ける<sup>⑥</sup>。

小寿は、これらキリスト教世界に連なる人たちからウイルソンやケーリを紹介されたのだろう。クラークソンの立てた規定では、小学校の卒業生は神戸英和女学校の第1年次に入学するはずであった。想像するに、ウイルソンとケーリは小寿の学習到達度の高さを見て取って、タルカットと相談し、英和女学校第4年次への入学の推薦をしたのではないか。小寿の家族に関する記述は見いだせなかったが<sup>⑦</sup>、文部科学省の『学制百年史』によると、1879年の女子の小学校就学率は22.6%とのことであり<sup>⑧</sup>、それを勘案すると、小寿の親御さんには娘

の教育や宗教信仰に対する積極的な姿勢が見られ、先進的な人であったであろうことが想像される。

小寿は、その情熱に応えた人であったと感じる。山陽英和女学校の記録には、小寿が1882年1月から1886年6月まで「英和女学校ヲ教授」<sup>⑨</sup>したとある。これは彼女が生徒であった期間を含んでいる。他の資料によると、彼女が教授したのは英文法、萬國歴史、幾何、代数であった<sup>⑩</sup>。今日と制度は異なるので一概に語れないが、生徒の立場で他の生徒に数学を教えたというのだから、優秀であったばかりではなく、生徒からも教職員からも信頼された人だったのだろう。

そうして小寿は1886年11月の山陽英和女学校開校にあたり、同年6月に上述の小野田元に呼び戻されるかたちで母校である神戸英和女学校の教員を辞し、山陽英和女学校の初代主任教師に就任する。神戸の辞任から岡山の開校までの間、小寿は「男女は車の両輪」と謳う「山陽英和女学校設立趣意」を執筆し、教育カリキュラムを整えるなど、学校運営の礎石を据えた。また山陽英和女学校の教科リストには数学や植物学、経済学など、人文系から社会科学、自然科学まで幅広い領域の科目が設定されており、かつそれらに英語の教科書を指定するなど<sup>⑪</sup>、主任教師として、自らが仕える学校の教育に特色を与えるため、努力を重ねたことが分かる。われわれとしては、そこに彼女が神戸で学んだことが映し出されていると期待したいところではある。開校後は英語と数学を担当し、宣教師と交代で毎朝始業前に祈祷と説教を行い、1時間の聖書講義を続けたことが伝えられている<sup>⑫</sup>。小寿は主任教師に着任するが、翌年7月にはその職を辞し、9月には伝道者で同志社教授を務める金森通倫と結婚。そうして京都に居住し、その後、金森の転任に伴い、東京、札幌に居住した。札幌では高等女学校で英語を、東京では音楽学校と女子高等師範学校で修身を担当し、教育に力を注いだ<sup>⑬</sup>。加えて日本キリスト教婦人矯風会や婦人参政権の運動にも参画するなど、終生「男女は車の両輪」とする考えを携えて歩み抜いた。1912年5月11日、東京千駄ヶ谷の自宅で病気のため没した。49歳であった。

金森は新神学の影響や同志社内部の不調和もあって1890年代前半には棄教し、キリスト教界からも離れる。これを「牧師廃業」と評する人もいる<sup>⑭</sup>。そうして政界に転じ、さらに三井鉱山や米穀取引など実業界に身を置いた。しかし

金森は小寿逝去(1912)の後、改めて信仰の問題を考え、キリスト教世界に戻る。小寿からの良き感化があったのだろう。金森の『回顧録』には、彼の説教を小寿が口述筆記していたと思えるくだりがある。その文脈で、金森は小寿のことを「批評眼の鋭い」と評している<sup>⑮</sup>。この箇所からは、小寿が日頃は夫の説教に鋭い批判を加えていたことが窺える。そのような場面を想像すると、小寿は単純に夫に従うのではなく、「車の両輪」との表現通りに対等な関係に立つ人であったことが分かる。第1期生から続く女学院生のネイチャーが垣間見られるのではないか。学院の創立150周年という神戸女学院とその教育を振り返る機会に、まことにふさわしい学生像と出会えたことを感謝に覚える。

#### 註

- ① 山陽高等女学校編刊『五十年史』1936年(以下『五十年史』)、p.15による。
- ② 山陽学園所蔵の原稿「創立時代の人物紹介」による。
- ③ 『五十年史』 p.15
- ④ タルカットは1880年7月5日付書簡で、同年4月に岡山を訪問し、そこに「働き手たちの気持ちの良い会」(a pleasant circle of workers)が存在していることに言及し、岡山での伝道への希望を述べている。若山晴子他「タルカット書簡 訳および註(二)」『神戸女学院大学論集』第25巻第3号(1979) pp.127-156, pp.143-144
- ⑤ 山陽女子中学校・高等学校図書委員会「図書委員会ニュース」2008(平成20)年10月15日号
- ⑥ 大西絹は岡山教会会員で、山陽英和女学校開校の時代に「幹事兼舎監」を務め、寄宿舎で生徒と寝食を共にしたという。山陽学園図書委員会「図書委員会ニュース」2003(平成15)年10月16日号
- ⑦ 『五十年史』p.15は、小寿を「岡山県平民」と記しており、家庭について特記事項はなかったと想像される。
- ⑧ [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/others/detail/1317590.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317590.htm)による。
- ⑨ 『五十年史』 p.15
- ⑩ 本学院第3回卒業生の安田鹿による。『めぐみ』第55号(1913年3月20日)付録p.5。また同じ号には渡邊常による第1回卒業生の動向が特集され、p.13には、小寿が神戸英和女学校卒業後、母校で数学を教授したと記されている。
- ⑪ 『五十年史』 pp.13-14
- ⑫ 『山陽学園図書館新聞』1978(昭和53)年7月18日号、p.4
- ⑬ 『めぐみ』第55号、p.13による。
- ⑭ 本井康博「遍歴する牧者 金森通倫」『同志社時報』第113号(2002)pp.44-49, p.47
- ⑮ 金森通倫、金森太郎、濱潔『回顧録——金森通倫 自伝』アイディア出版部、2006年(改訂第1版) p.91

# 創立 150 周年に寄せて

—変動の時代における学院の使命と展望—

中野 敬一

本学院は創立 150 周年を迎えた。築き上げられてきた伝統と歴史は、神の導きのもと、先達の不断の努力によって紡がれてきたものであり、卒業生の多様な活躍は、学院がその使命を着実に果たしてきた証左である。私たちは、時を超えて学院を支えてくださった無数の支援者への感謝を、改めて深く胸に刻んでいる。

しかしながら、祝賀の思いに浸ってばかりはられない現実もある。俯瞰的かつ客観的に現状を見据えなければ、取り返しのつかない危機に直面しかねない。

教育界にはいかなる時代にも課題が存在し、特定の時代だけが平穏であったわけではない。ところが今日、大学を取り巻く環境はこれまでにない厳しさを帯びている。その背景にあるのは、劇的な人口動態の変化である。日本の 18 歳人口は 1992 年に約 205 万人でピークを迎えたが、2025 年には約 109 万人へとほぼ半減した。進学率の向上によって学生数は一定程度維持されているものの、18 歳人口そのものの減少は大学経営の根幹を揺るがす深刻な要因となっている。「選抜機能を維持する上位校」と「全入状態の大学」との二極化も進み、大学改革や質保証の必要性が一層強く叫ばれている。

さらに女子大学は、もともと志願者数が共学大学より少ないうえ、近年は志願者の共学志向が強まっている。この傾向は兵庫県でも顕著であり、かつて 8 つあった女子大学のうち 1 大学が募集停止となり、4 大学が共学化し、女子大学として存続しているのは、本学を含む 3 大学のみとなった。従来、多くの女子大学は教養教育を中心に独自の役割を担ってきたが、資格取得や専門職志向、

社会学系や理数系分野への関心が高まる中で、その強みが十分に伝わりにくい状況が生じ、志願者獲得において一定の苦戦を強いられている。

とはいえ、ただ悲観に陥ることは今なすべきことではない。ましてや我々のミッションが終わったわけでもない。150年前、創立者は男性の後ろをうつむきながら歩く女性を見て「背筋を伸ばしなさい」と励ました。一人ひとりが神の目には尊い存在であり、「属性」に縛られずに生きることを応援したのである。それから長い年月が経過し、女性の社会進出やキャリア形成は確かに大きく進展した。しかし、統計上の改善と日常生活での体感には依然としてギャップがある。世界的に見ても、また先進国の中でも日本のジェンダーギャップ指数が低いことは明白であり、男女格差やジェンダーバイアスは依然として残っている。社会全体がそれらを克服するには、残念ながらまだ時間を要すると言わざるをえない。

本学が果たすべき役割は一層明確になっている。今後も女性をエンパワーし続けていくことである。女性が自由に発言し、主体的に行動できる環境の中で学び育ち、自信をもって社会へ踏み出せるよう支援する場を守り抜かなければならない。その意義を語り、理念にふさわしい教育を提供していく必要がある。

具体的には、18歳に限らずあらゆる年代の女性を対象とし、4年間にとどまらず生涯にわたって支援することが求められる。生涯学習の機会、キャリア形成支援、卒業生ネットワークの強化などを通じて、「最も頼りになる場所は母校である」と言っていただけの大学でありたいと願っている。

150周年を迎えた今こそ、創立者の精神に立ち返り、未来に向けて新たな一歩を踏み出す時である。社会の変化は厳しく、大学を取り巻く環境も容易ではない。しかし、本学が大切にしてきた価値は揺らぐことがない。女性が自らの可能性を信じ、力強く歩むための学びの場を守り、さらに発展させていくことこそ、私たちに託された使命である。

(学長)

## 創立 150 周年に寄せて

森谷 典史

10月12日（日）に創立150周年記念式典が行われました。150年を迎えるにあたり、いろいろな方々や部署が、その準備に当たられてきました。式典に加えて、演奏会や講演会と、参加された方々も150年の歴史を感じることができたと思います。そして、150年の間、神様の導きによって、神戸女学院が成り立ってきた学校であると改めて感じることができました。

神戸女学院100年史を見てみると、第3章に「試練の時代」と書かれた章があります。ブラウン校長の時代、国家主義が大きくなる中、キリスト教主義から離れていく方々が増えていきました。ブラウン先生は、キリスト教主義学校の本領を保持するために努力はされましたが、キリスト教主義学校を知的体験としてのキリスト教という受け止め方をする人たちが離れていったようです。

現在神戸女学院は、ここ数年大学の入学者数を減少させていましたが、少しずつ希望定員を満たす方向に150周年を原動力として復活しています。しかし、本来の目標、キリスト教の精神をもとにしている学校であることを忘れていくかのようなところも見え隠れしています。

2025年に施行されました神戸女学院寄附行為では、理事長は「キリスト教信徒でなければならない。」が「キリスト教信徒であることを原則とする。ただし、キリスト教の理解者を選定することができる。」に代わりました。経営の危機を脱するための、施策の一つですが、大切なことは、学校を存続させること。なのか、キリスト教の精神を存続させることなのかと問われると、前者の選択をしたと受け取られかねない変更です。

神戸女学院は、建学以来、教育の根幹はキリスト教と国際理解の精神でありました。このことを忘れることのないように、また、この精神を忘れたときには、神様からの使命が終わったと考えてもよいのかもしれませんが。

しかし、それでは神様からの使命を途中で投げ出してしまうことになってしまいます。私たちはもう一度、建学の精神に立ち返り、神戸女学院が神様によって建てられた学校であることを改めて確認し、広く周知し、そのことを喜ぶ人たちに集まってもらうことができる学校へと変わっていかねばいかなないと感じています。そのためには、あらゆる改革と、チャレンジが必要となります。また、そのことを実施していく力が必要です。

「Bridging Generations」未来を生きる人達のために、何ができるのかを考える 150 周年の時となるように、関係者一同協力し、神様のみ旨に答えることができるが学院となることを祈念いたします。

(神戸女学院中高部前部長)

## 神戸女学院創立 150 周年に寄せて

—Ask what we can do for Kobe College—

米津 博子

1875 年 10 月 12 日神戸女学院は現在神港学園が建つ神戸市中央区山本通に生徒 26 人の小さな女学校として始められました。神様に導かれ、150 周年を迎えられましたこと、同窓生を代表しめぐみ会よりお慶び申し上げます。

150 年の歴史を重ねて来られましたのは、キリスト教が解禁されて間もない時代に学校を立ち上げてくださったタルカット先生、ダッドレー先生、岡田山への移転を指揮された第 5 代院長デフォレスト先生に始まり、私たち学生・生徒を愛し自主自律の女性に育ててくださった沢山の先生方、職員の皆さま、同窓生、学生・生徒およびご父兄の皆さまのお蔭と感謝の気持ちで一杯です。

少子化、女子大離れと神戸女学院を取り巻く社会的状況は決して楽観できるものではありません。しかしながら神戸女学院は今まで何度も難局を乗り越えてまいりました。第二次世界大戦では校舎の焼失や戦後は進駐軍にキャンパスが接収されそうになる危機もありました。阪神淡路大震災では学生寮を含むいくつかの校舎を失いました。創立間もない頃から神戸女学院と併走し、支えてきたのが 1892 年設立の私たち同窓会組織である公益社団法人神戸女学院めぐみ会と 1920 年設立の KCC-JEE(Kobe College Corporation Japan Education Exchange)です。現在神戸女学院が建つ岡田山の土地確保には、95 年前竹中工務店店主竹中藤右衛門氏のお力添えを得て同窓会が大きな力を発揮し、美しいヴォーリズ設計の校舎は KCC の多額の寄付により建築されたものです。

今般神戸女学院創立 150 周年に際し、めぐみ会は同窓生から寄せられたご寄付の中から学院の「創立 150 周年記念募金」に 1 億円と、大学に神戸女学院創立 150 周年めぐみ寄付講座 8 回、中高部に神戸女学院創立めぐみ寄付講演会 5 回をプレゼントいたしました。2025 年度末まで引き続き「神戸女学院創立 150 周年記念めぐみ寄付」を募集し、現役の学生・生徒のために寄付してまいります。

めぐみ会は設立当初から学院を支え、社会に貢献することを目標としてきました。神戸女学院がこの厳しい時代を女子の教育機関として生き残るために、私たちは何ができるのか？後輩たちに、どうしたら神戸女学院を残すことができるのか？同窓生の皆さま、学生・生徒の皆さま、ご父兄の皆さま、神戸女学院を愛してくださっている教職員の皆さま、

‘Ask what we can do for Kobe College!’

皆さまおひとりおひとりのお力が必要です。神戸女学院らしく、格好つけずに全力で駆け抜けましょう。そこに神様が道を用意してくださると信じます。

\* 神戸女学院創立 150 周年記念式典・祝辞から加筆・修正

(公益社団法人神戸女学院めぐみ会会長)

## 創立 150 周年記念プログラムの取組と成果

北條 敦子

学校法人神戸女学院では学院創立 150 周年を迎えるにあたり、本学院に連なる多くの人と共に祝い、思いをいたす時とするために、2019 年に 150 周年事務局を設置し、2020 年 2 月以後はパートナー企業として選定された大日本印刷株式会社との協同により記念プログラムの企画検討に着手し、順次、実行に移すこととなりました。

最初に実施した取組は「150 周年特設 Web サイト」の立上げです。学院の想いを伝えるメッセージ「**Bridging Generations** /150 Years of Excellence in Women' Education / 未来を生きる人たちのために。」と、公募により最優秀賞に選ばれた同窓生、夫 貴代氏の原案による「周年ロゴマーク」の下、本学院が 2025 年に 150 周年を迎えることについて、発信し始めました。サイト内のコンテンツとしては、第 5 代デフォレスト院長の講話が引用されたステートメントと院長・学長・中高部長からのメッセージ、学院の沿革に加え、Story1「神戸女学院が継承してきた理念と、これまでの歩み」、Story2「未来を生きる人たちへ、神戸女学院の思い」の 2 編の動画、更には各界で活躍する同窓生 24 人からお寄せいただいた応援メッセージ、カウントダウンボードの紹介他の新着情報と併せて、記念募金活動のご案内も行いました。

次に記念行事のうち、現役の生徒・学生に向けた取組として、ユニバーサルマナーについて、全員が所定の講習を受講することで 3 級の認定を受け、更に希望する学生には 2 級の講習も受講できるカリキュラムを用意し、教職員も含め延べ 2000 名以上が 3 級、更に 55 名が 2 級を取得し、実際に西宮市の行事等において学生達がボランティアで活躍する等の成果に繋がりました。

いよいよ 2025 年度に入り、更なる機運向上のための取組として、正門前他に

周年記念フラッグの設置と、講堂横の渡り廊下に大型ポスターの掲出がなされました。全長約12mのポスターでは、学院に長く語り継がれている先人達（生徒も含む）の言葉が時系列的に並べられ、白地にブルー基調のグラデーション模様により、それらが過去から現在、未来へと繋がって行く様子を可視化することで、生徒・学生の自校史の啓発を促すよう図りました。

そして当日となる10月12日に向けては、一週間限定で阪急大阪梅田駅構内の壁に大型の周年広告を掲出いたしました。神戸山本通時代のモノクロの古写真と、今の学院を伝える色鮮やかな画像をコラージュし、学院カラーの紺地に白抜文字で「周年ロゴマークとメッセージ」および中高部と大学の校名が記された特大ポスターは、SNS等による拡散効果もあり、現地では記念撮影に訪れた同窓生らが世代を超えて声を掛け合う姿も見られ、道行く人にも大いにアピールする学院広報となりました。

これらに加え、学院ブランディング戦略における周年アピールとしては、プロモーション動画を制作し Web メディアによるターゲット配信を実施、また同じ動画の縦型版を学院公式 Instagram にも投稿したところ6万回以上も視聴される等、通常のリール動画の約5倍となる大きな反響がありました。更に Instagram 自体の周年企画としては、各時代の学院を象徴する人物と出来事を紹介するグリッド投稿を9月27日から記念日当日まで16日間連続で実施したところ、期間中の閲覧数は通常投稿時の約5倍の190万、またリーチしたアカウント数も約6.5倍の26.5万を記録、フォロワー数の年度目標「8000人」を10月半ばに達成するなど、大きな反響を得ることができました。

先に紹介しました特設サイトの冒頭に「この祝年は、未来の神戸女学院生について熟考し、望ましい在り方を共有し、そのための道を用意する機会です。」と記載されているように、学院に連なる全ての人と共に創立150周年を祝い合いながら、一連の周年事業の成功も相俟って、各々が愛校心を深め、その教育の業<sup>わざ</sup>を次の世代へと繋ぎ続ける想いを確認いたしましたことをご報告申し上げます。

(学院事務局長)

## 神をたたえよ 音高らかに

なかにしあかね

2025年10月12日エミリー・ホワイト・スミス記念講堂において、神戸女学院創立150周年記念式典が執り行われた。式典は3部から成り、第2部の記念演奏を音楽学部が担当した。その中で、筆者が担当した合唱「詩編150編 神をたたえよ 音高らかに」について、以下に詳細を記す。

式典のための新作合唱曲の作曲と演奏をご依頼頂いたのは2023年10月。それから2年間をかけて、内容を詰め、学生の合唱隊の音を作り上げた。合唱隊は筆者が担当する「合唱特別実習」(全学対象特別開講科目)履修者となった。

テキストは、飯院長の訳詩による「詩編150編」で、今回の作品のために飯先生がヘブライ語から訳されたものである。訳詞の段階で飯先生が特にご苦労された点は、「シンバル」という言葉の扱いと伺った。現代のオーケストラで鳴るシンバルではない、当時のシンバルを偲ばせる良い日本語はないかとかなり探されたようだが、結局シンバルに落ち着いた。

2025年夏に「合唱特別実習」授業において、「詩編150編」について飯先生にレクチャーして頂く機会を設けた。多くの学びと示唆を頂いたが、中でも演奏に反映したいと考えたのは大きくまとめて以下の3点である。

1. 詩の前半では、聖なる所で、力のある大空で、勇ましさにより、高貴なる強さにより、と力強い言葉が続くが、それは同時に自らの弱さをも認めている。その詩の奥深さを表現したいということ。
2. 詩の中盤では、角笛、琴、豎琴、手鼓、舞踊、弓弦、笛、音高らかなシンバル、勇壮なシンバル、と様々な楽器や舞踊が入り混じる。その多彩さを音楽的に表現する工夫をしよう、ということ。

3. 終盤に「すべて息あるものが主をたたえますように」という歌詞があり、これこそが 150 編に及ぶ詩編の最後を飾る第 150 編において、民族や階級を超えたすべての人、すべての命と共にあろうとする姿勢の表れであること。これは、それまでの詩編に見られた民族主義、ユダヤ人至上主義などからのおおいなる方向転換であり、この「すべて息あるものが」を最終の第 150 編に持ってきたことに、編纂者のおおいなる意図があること。その意義をふまえて演奏しよう、と学生達と話し合った。

作品所要時間は約 7 分。式典では「合唱特別実習」履修者 19 名【音楽学科 15 名(声楽専攻 9 名、ピアノ専攻 4 名、ミュージック・クリエイション専攻 1 名、音楽キャリアデザイン専攻 1 名)/総合文化学科 3 名/心理行動科学科 1 名】の学生達が、全員暗譜で演奏した。1 年生～4 年生までを含む多彩なメンバーを各パートリーダーがよくまとめ、一体となったサウンドを作り上げてくれたと思う。素晴らしい初演をしてくれた学生達と伴奏者の浦部晏未さんに感謝したい。

女声合唱曲「詩編 150 編 神をたたえよ 音たからかに」は、楽譜が 2025 年 11 月 1 日付でカワイ出版より出版され市販されている。今後全国に賛美の歌として広がっていくことで、神戸女学院 150 周年から発信する豊かな未来への一筋となれたら嬉しく思う。尚、この作品は、2025 年 12 月 2 日音楽学部定期演奏会においても再演された。

以下に式典第 2 部全容を記しておく。

#### 1. 合唱

「詩編 150 編 神をたたえよ 音高らかに」(150 周年記念委嘱作品・初演)

飯 謙 訳詞/なかにしあかね 作曲

合唱: 神戸女学院 150 周年記念合唱隊(「合唱特別実習」履修者)

指揮: なかにしあかね(教授)/ピアノ: 浦部晏未(音楽学部伴奏要員・本学卒業生)

2. ウィンドオーケストラ

「愛の橋はここに架かりて」(150周年記念委嘱作品・初演)

八木澤教司 作曲

演奏:神戸女学院大学音楽学部ウィンドオーケストラ

指揮:八木澤教司(准教授)

3. オーケストラ

「神戸女学院卒業式のための行進曲」(管弦楽版初演)

March for the Graduation Ceremony for the Kobe College

ヨーゼフ・ラスカ 作曲 / 佐々比香莉(本学卒業生) 編曲 / 松浦修 監修

演奏:神戸女学院大学音楽学部オーケストラ / 指揮:松浦修(教授)

演奏された3曲すべてがこの式典のための新曲/初演であった。

音楽学部として神戸女学院創立150周年を共に祝う機会を頂けたことを、ありがたく光栄に思う。

(音楽学部長)

## 詩編 150 編

神をたたえよ 音高らかに

飯 謙 訳詞

ハレルヤ

神をたたえよ その聖所で

神をたたえよ その力のある大空で

神をたたえよ その勇ましさにより

神をたたえよ その高貴なる強さにより

神をたたえよ 角笛の響きにより

神をたたえよ 琴と豎琴により

神をたたえよ 手鼓と舞踊により

神をたたえよ 弓弦と笛により

神をたたえよ 音高らかなシンバルにより

神をたたえよ 勇壮なシンバルの音により

すべて息あるものが主をたたえますように

ハレルヤ

## 150年の時を超えて — 英語教育と国際学部の継承

白井由美子

1873年、タルカット、ダッドレー両先生は、どのような想いを胸に日本へ向かわれたのだろうか。キリスト教がまだ日本で禁じられていた時代、アメリカで船に乗り、はるばる海を渡って来日された。日本に関する情報もなく、言葉も通じず、文化も異なる。そのような状況の中で、先生方を日本へと向かわせた原動力は何であったのだろうか。ただキリスト教を伝えたいという思いだけであったのか、それとも、女子教育を通して社会に貢献したいという強い使命感があったのだろうか。

3月に来日し、10月には花隈で私塾を開くというそのヴァイタリティ。たった7か月でそれを成し遂げ、さらに2年後の1875年には、山本通に女子寄宿学校「女学校」を開校された。それが、現在の神戸女学院である。

あれから150年。神戸女学院は山本通から岡田山へと移転し、学べる分野も広げ、絶えず成長を続けてきた。ここ岡田山の地に身を置くと、その力強さとともに、宣教師の先生方が女子教育に込められた想いを、今もなお感じることができる。この恵まれた環境の中で学び、働くことのできる学生、教職員は、本当に幸せである。

このような長い歴史をもつ神戸女学院において、外すことのできない柱の一つが「英語教育」である。神戸女学院が人々の記憶に刻まれるとき、常にその中心には英語教育があった。タルカット先生、ダッドレー先生が讃美歌を用いて正しい発音を教え、英語を音声言語として学生に体得させるところから、本学の英語教育は始まった。

神戸港に停泊していた海外の船員から、神戸女学院の学生が発音を褒められたというエピソードも残されている。耳から英語を取り入れ、どこに出ても恥ずかしくない英語を身につけた卒業生たちは、各地で教員として教壇に立ち、日本の英語教育を支えてきた。学生の英語力の高さが評判を呼び、教員採用試

験が免除された時期があったこと、また、そのことをデフォレスト先生が大変喜ばれたという記録も残っている。こうした即戦力としての英語力を身につけた卒業生は、企業においても高く評価されてきた。

この英語力こそが、神戸女学院の大きな強みである。その英語と真摯に向き合ってきたのが、国際学部、そしてその前身である文学部英文学科である。私が学生であった頃は、学年を見渡すと英語力に自信をもつ学生が多く、教員にも本学の卒業生が多かった。「英語ができて当たり前」という高い基準のもと、厳しい授業が展開されていた。現在では、学生の英語力や学習経験はより多様になり、英語教育に求められる役割も、時代とともに変化してきている。

しかし、本学の長い歴史において、英語力だけが重視されてきたわけではない。「人間としてどのように生きるのか」という問いが、常に教育の根底にあった。文学作品の登場人物を通して人間を考え、言語学を通して相手に分かりやすい表現を探り、各国の文化や社会に触れながら、多様な価値観を学ぶ。英語力とともに、人生を豊かにする土台を育む教育が行われてきた。その教育は、今も確かに受け継がれている。その証が、卒業式における晴れやかな4年生の姿である。

150年を経た今、タルカット先生、ダッドレー先生、そして岡田山に建ちゆく学び舎を見て“Beauty Becomes a College”の詩を綴られたデフォレスト先生は、現在の神戸女学院をどのようにご覧になるだろうか。英文学科が国際学部へと発展した姿を見て、「時代に応じた教育を150年にわたり続けてきましたね」と評価してくださるだろうか。それとも、「まだできることがある。神戸女学院の教育は、さらに学生の可能性を広げられる」と、叱咤激励をくださるだろうか。英文学科の卒業生がさまざまな立場で活躍している現状を思うと、まだ道半ばであるという想いを抱きつつも、一定の評価をいただけるのではないかと感じている。次の150年を見据え、国際学部は、これまで英文学科が築いてきた教育の積み重ねの上に、さらに新しい価値を加えていく責任を担っている。学生一人ひとりが、自らの可能性を広げ、社会に貢献できる力を育む場であり続けること。それこそが、デフォレスト先生の言葉にある「次の世代へ」だと、国際学部長として、今、強く感じている。

(国際学部長)

## 神戸女学院創立 150 周年をおぼえて

藏中さやか

創立 150 周年の 2025 年 5 月、学校法人神戸女学院と一般財団法人日本聖書協会が主催する「近代日本の文化形成と未来へのまなざしー聖書翻訳の貢献」という講演会が本学で開かれた。1875 年にはじまった日本の聖書普及活動を担う日本聖書協会と神戸女学院がともに創立 150 周年を記念する行事で、本学院からは大澤香文学部准教授が講演をされ、関連する学院所蔵資料の紹介及び展示をおこなった。担当者の一人として本事業にかかわったことは、聖書翻訳をとり上げた講演会のテーマを越えて、キリスト教学校であり女性のための教育機関である神戸女学院について考える契機となった。

周知の通り、神戸女学院の歴史は、創立者である女性宣教師タルカット先生、ダッドレー先生のお働きにはじまる。1873 年 2 月、キリスト教禁止の高札が撤廃された 1 か月ほど後に、先生方は来日し伝道活動を開始された。神戸の花隈から地を移し白洲退蔵の持ち家で開いた私塾は、やがて学校へという機運が高まる。このお二人のまわりには、その活動を支える人々の存在があった。

学校建築のための募金の趣意書である「女学校寄附書」（『学院史料』vol.1、口絵に写真掲載、「神戸女学院創立 150 周年記念展示 III Bridging Generations」展示目録参照）の末尾には旧三田藩主九鬼隆義を筆頭に寄付者 7 名の署名が連なる。趣意書本文は「婦女子の教方にいたりては未だ行届かざること少からず実に残念の次第」という当時の女性教育の実情にはじまり、「教育慈愛ふかき母たる者のため」の学校の必要性を説く。学校は「英吉利読書習字 日本読書習字」すなわち英文、和文の読み書きを、さらに「地理学 生理訓蒙 萬物理学 天文啓蒙」、そして「聖書」を教える場とすることが記される。日本人教師が歴史や当時一般の女子教育である手紙の書き方、礼法、家事、裁縫を担うことも明示す

るのは、当時の日本の慣習に配慮したことによろう。掲げられた女性のための学びは、英語のみ、聖書のみ、といった偏りのあるものではなくアメリカのリベラルアーツカレッジに倣うものであった。当該資料を収める封筒には「女学校寄附書」と墨書きされ、鉛筆書きで「重要」「明治八年」と記される。判読不明な箇所もあるが、“Written by J.C Berry”“1874-5s”“Translated by Mrs. Suzuki”と記載されているようである（複写物による確認）。アメリカンボード宣教師である J.C ベリーが起草し、鈴木夫人が翻訳したものとなるが、史料室佐伯裕加恵氏の調査によると、鈴木夫人は神戸教会最初の受洗者の一人である鈴木清の夫人梅子（旧姓塚田）を指す（『神戸女学院百年史 各論』42頁参照）。

何よりも注目したいのは創設当初の先進的な教学構想である。これは<sup>おんな</sup>女学校から神戸女学院に受け継がれ、時代に応じた改編を加えつつ現在に至る。1948年の学制改革の後、新制大学として音楽学部とともに置かれた文学部の編成は英文学科、社会学科、家政学科で、社会学科の専門科目は社会学・福祉・思想・文化史等、多岐にわたった。家政学科独立の後、1976年に社会学科は国際理解と学問の総合化を掲げる総合文化学科に改組し、2024年の国際学部開設により、文学部は総合文化学科のみとなった。神戸女学院創立150周年に引き続き、2026年に開設50周年を迎える文学部総合文化学科は、人文学系および社会学系に属する多様な領域を、広く「文」にかかわる「学」びとして総合的・横断的にとらえ、現代の研究動向や社会的課題に応答する学修を体系的に提供し、全学のリベラルアーツ教育の中核にある。

このように150年の歩みの起点をかえりみる時、女性のための教育機関として創設された神戸女学院が、これまでも、そしてこれからも、大切に育み実践していくべき教育の根幹は、キリスト教主義、国際理解の精神、リベラルアーツ教育であることを改めて思う。

（文学部長）

## 150 周年のお祝いと感謝

石谷 真一

創立 150 周年、おめでとうございます。私は 2004 年に本学に着任し、以来教育の業に携わらせていただくと共に、大学人としてまた一人の人間として本学で成長させていただけたことに心より感謝を申し上げたいと思います。私が着任した際には、人間科学部人間科学科が心理・行動科学科と環境・バイオサイエンス学科の 2 学科に改編された時でした。人間科学部の前身である家政学部の時よりおられる年配の先生方に囲まれ、緊張した面持ちで勤め始めたことを覚えております。しかし経験豊かな先生方がとても暖かく新任の私を迎え入れてくださったことが強く印象に残っております。その伝統は今も続いていると感じるのですが、私の前任校とは対照的で当時の私は少々不安になるほどでした。

私はこの 20 年あまり臨床心理士、公認心理師養成のカリキュラムを中心に学部生、大学院生の教育指導にあたらせていただいておりますが、その間に実習施設でもある、大学院人間科学研究科附属の心理相談室を二度にわたり改築していただいたことも大変ありがたく思っております。最初の心理相談室は現エミリー・ブラウン館の場所に一軒家のような建物としてありました。その後、理学館別館を改築して心理相談室が移転し、そして 150 周年を迎えた本年度末には新棟小林季子記念館に入るようになっており、現在着々と準備を進めているところです。大学のご理解とご尽力があって来年 4 月には新棟での教育が始められること、重ねて感謝申し上げます。

さて、現心理学部心理学科は、2024 年 4 月に人間科学部心理・行動科学科を名称変更し一学部としてスタートしました。その際、「こころと社会の架け橋になる」を掲げ、公認心理師、臨床心理士資格をはじめ心の専門職を目指す臨床

心理学、心理学の知識ばかりでなく方法論を身につけ社会の各所でそれを活かすことを目指す行動科学、そして精神保健福祉士資格を目指す精神保健・福祉の3本の柱からなるカリキュラムを整備しました。第一期生、二期生とも定員を大きく上回る入学生を迎えることができ、順調な門出となっています。しかしこれに安住することなく、ミッションステートメントとして受け継いできた本学の伝統と精神を、心理学部の教育に具現化できるよう、さらなる展開を目指し検討に入っているところです。

目まぐるしく移り変わり分断と対立がいくつもの次元で顕在化する昨今、人が人を思いやり理解し協調することが以前にも増して難しくなっているように思います。本学のミッションステートメントは今の時代にこそ求められていると思います。心を介して人と関わり、人間関係を理解し、自分が為せることを見出していくことに心理学は役立つところの多い学問です。本学の更なる発展に心理学部が貴重な貢献を為せるよう今後とも邁進してまいります。

(心理学部長)

## 創立百五十周年によせて

横田 弘文

創立百五十周年という節目の年を、学院の一員として迎えることに深い感慨を覚えます。長い歴史のなかで、神戸女学院は「愛神愛隣」の精神を大切にしながら、時代ごとに求められる教育を形づくってきました。先人たちが積み重ねてこられたその歩みの上に、今の私たちの学びと教育があることを、改めて心に刻む機会となりました。

その節目の年に、新しい学びの場として生命環境学部が誕生しました。現代社会は、気候変動や生物多様性の喪失、環境汚染など、地球全体の健やかさが揺らぐ時代にあります。人間の健康や暮らしの基盤は、地球環境の健全さと切り離すことができず、まさに「プラネタリーヘルス（地球と人の健康）」の視点が求められています。こうした課題は、科学技術だけでなく、私たちの価値観や生き方そのものを問い直すものです。生命環境学部は、神戸女学院の建学の精神に根ざしながら、自然と人、そして社会のよりよい関係を探究し、次代の学びを創造していく場として生まれました。

生命環境学部は、2024年度まで続いた人間科学部環境・バイオサイエンス学科の教育・研究を基盤としつつ、より広い視野で「生命」と「環境」の関係を学ぶ学部として再編されました。設立構想の検討は2021年に始まり、地球環境問題への教育的責任、理系教育における女子大学としての貢献、そして学院の理念を次の時代にどう生かすかをめぐって、多くの議論が重ねられました。その歩みのなかで、「科学の探究と人へのまなざしを両立する学び」という学部の方向性が形づくられていきました。

学部名に掲げた「生命」と「環境」という二つの言葉には、自然と人間、科学と倫理、個と社会をつなぐという意味が込められています。生命環境学部で

は、自然科学を基盤としながらも、人文社会の視点をあわせ持ち、生命を尊び、環境と共に生きる社会を考えます。プラネタリーヘルスの視点に立ち、地球の健やかさと人間の幸福を一体のものとしてとらえ、科学と倫理の両面から持続可能な未来を探究します。学部カリキュラムでは、実験やフィールドワークに加え、環境政策や生態系サービス、ネイチャーポジティブなど、社会と自然を結びつける学びを重視しています。学生たちはそのなかで、地球規模の視野から地域や自分自身の暮らしを見つめ、「科学する心」と「共に生きる感性」を同時に育てています。

また、女子大学としての伝統を受け継ぎ、理系分野においても女性が自ら問いを立て、社会に新しい視点をもたらすことを大切にしています。フィールドでの体験や地域との協働を通じて、自然を科学的に探るだけでなく、生命や環境に向き合う姿勢そのものを学んでいきます。その姿は、「愛神愛隣」の精神を現代の理系教育に息づかせるものであり、まさに“科学する女性”の新しいかたちと言えます。

百五十年という長い歴史を振り返るとき、神戸女学院は常に、時代の課題に真摯に向き合いながら、新しい教育を生み出してきました。生命環境学部の誕生もまた、その精神の継承であり、次の百五十年へとつながる新たな一歩です。生命を尊び、環境を守り、他者と共に生きる学びを未来へとつないでいくこと——それが私たちの使命であり、願いでもあります。学院の長い歩みに感謝しつつ、これからも時代に応答する学びをこの学部から発信していきます。

(生命環境学部長)

## 神戸女学院創立 150 周年記念式典

2025年10月12日（日）、曇り、神戸女学院創立150周年記念式典がエミリー・ホワイト・スミス記念講堂にて挙行された。

講堂内1階、講壇に向かって右列の前方には、この記念式典のためにアメリカから来日されたコーベカレッジ・コーポレーション（Kobe College Corporation Japan Education Exchange—以下 KCC）関係者3名、ダッドレー先生（Miss Julia Elizabeth Dudley）のご親戚5名、デフォレスト先生（Miss Charlotte Burgis DeForest）のご親戚2名の計10名が着席されているのが見える。来賓、学院関係者も1階の前方の席に座っている。現旧教職員、めぐみ会会員が席を埋めている。2階には大学生、中高部生徒がいる。壇上、下手に司式の中野敬一学長・学院チャプレン、講壇の左側（下手側）には前列左から立石浩一理事長、飯 謙院長、後列左から北條敦子学院事務局長、大門光歩中高部チャプレン、森谷典史中高部長、講壇右側（上手側）には西宮市長・石井登志郎様、キリスト教学校教育同盟関西地区代表理事・関西学院院長・中道基夫様、KCC 会長・大東由季様、公益社団法人神戸女学院めぐみ会会長・米津博子様が着席。

記念式典は3部構成となっており、その都度、総合司会の西 靖特別客員教授のアナウンスがあった。

第1部記念式は13時30分から始まった。片桐聖子学院オルガニストのオルガンの前奏に続き、一同で「われのかみにちかづかん」を唱和した。この讃美歌は1874年に刊行された神戸組合教会最初の讃美歌の第一番で、学院創立当時に歌われていたものである。当時の歌詞で歌った。森谷先生による聖書の朗読（マタイによる福音書22章34-40節）に続いて大門先生が祈禱を捧げられた。150周年の幸いに感謝し、神戸女学院がこれまでそれぞれの時代に希望を灯してきたことを覚え、学院が古びない使命をもって、新たな希望を与えていけるようにと。

飯先生は式辞の中で、歴史を紐解いて、26名で始まった小さな学校が今日あるのは祈りと奉仕によることに触れ、この神の業を共に喜びたいと言われた。キリスト教の信仰の核心は神への応答である。天地創造物語しかり。宣教師、キリスト者に市井の人々が加わり用いられるという相互受容によって学校は生まれ、向かい合う課題に対応して志を共にしてきた。神戸女学院は神の呼びかけに応答し、共感することで愛神愛隣を具現している。神に招かれていることに感謝をもってとらえたい。最後に先生は女性教育を継続する決意を述べて式辞を終えた。

一同で学院歌を歌い、4名の来賓から祝辞をいただいた。

石井様は西宮市に神戸女学院があることの価値について話された。戦火を潜り抜け、高度経済成長の時代にあって、西宮市が文教都市として住みたいまちナンバーワンとしてあるのは、神戸女学院が生態系を守ることを担ってくれたからに他ならない。女学院生ははっきりものを言うが嫌な感じはしない。卒業生の活躍は岡田山キャンパスと女子大学であるというバックボーンがあり、ぶれない姿勢を保ち続けていることにある。区切りは次へのスタートである。これからも共に歩んでいきたい。

中道様は学院の永久標語に言及してキリスト教精神について語られた。西郷隆盛は「敬天愛人」といった。それは見えないものを敬うという意味である。関西学院2代目院長の吉岡美国は「敬神愛人」といった。天から一步進んで神を敬うということである。この姿勢はキリスト教主義学校の基本であるが、神戸女学院の「愛神愛隣」はさらに一步踏み込んで隣人という、より具体的なものが示されている。単なる人でもなく他者でもない隣人の発見はキリスト教の最大の発見である。このことの現代での意味は大きい。新たな隣人を発見することと愛することは、現代に不可欠の資質である。この業が実践に息づいていくことを祈る。

大東様は英語でのスピーチであった。創立者の働き、デフォレスト先生とKCC、そしてパートナーとしてのKCCとめぐみ会について話され、さいごに神戸女学院のさらなる発展を祈ると締めくくられた。

米津様は同窓生として、歴代院長を始め学生・生徒を育ててくれたすべての

人びとに感謝を伝え、何度も難局にあった学院を KCC とめぐみ会が支えてきたことを語った。岡田山キャンパスはこの 2 つの組織が協力して成し遂げたものである。めぐみ会は社会貢献を目的・目標に活動している。「全力で駆け抜けましょう。そこに神様が道を用意してくださる。」私達への力強い呼びかけと宣言であった<sup>①</sup>。

頌栄 544 番を歌った後、元学院チャプレン・神戸女学院大学名誉教授である茂 洋先生から祝禱を受けた。先生は本学院創立 100 周年の記念式でも祝禱をくださった。今回も講壇に上がって一同への祝福をお祈りくださった。

この後、総合司会の西先生からプログラムにないお知らせがあった。石破 茂内閣総理大臣よりビデオメッセージが寄せられたという。会場は驚きでどよめいた。スクリーンが下ろされ、準備のために時間がとられている間、石破氏と神戸女学院の関係について疑問に思っている声が聞こえてきた。石破氏はメッセージの中で自らと神戸女学院の関係を説明された。第 1 回卒業生・金森（旧姓・西山）小壽が曾祖母に当たること、小壽の夫・金森通倫が牧師であり、その息子の妻・金森花子、つまり祖母も神戸女学院の卒業生であることを、穏やかなゆったりとした口調で丁寧の説明された。そして現在の日本におけるジェンダーの問題に触れ、神戸女学院の女子教育はジェンダー・ギャップ解消の力になるとの力強いメッセージをくださった。2 階席に座っていた中高生が「来てよかった」と感想を言い合っている声が漏れ聞こえてきた。

西先生から斎藤元彦兵庫県知事の祝辞の披露もあった。

この後、理事長からめぐみ会に感謝状の贈呈があった。めぐみ会は創立 150 周年に当たり学院に 1 億円の寄付をくださった。現在建築中の校舎は同窓生の名を冠して小林季子記念館と命名され、ラウンジにはめぐみコモンズという名称がつけられることになっている。

最後に廊下に展示されている掲示（阪急電鉄大阪梅田駅ムービングウォーク横の大型広告の紹介）の案内の後、休憩となった。

記念式の間にも雨が降ったようで地面はぬれていた。20 分間の休憩の間に参会者は三々五々に廊下の掲示を見物したり、知り合いを見つけて談笑したりしていた。講堂の外にはいくつもの人の輪ができていた。

式典出席者は来賓、KCC-JEE 関係者、めぐみ会、学生生徒、教職員をあわせて約 500 名であった。

20 分の休憩をはさんで 14 時 45 分から第 2 部の記念演奏が行なわれた。合唱、ウインドオーケストラ、オーケストラ、いずれの曲も初演であった。

合唱はなかにしあかね音楽学部教授作曲による「詩編 150 編 神をたたえよ音高らかに」、女声合唱である。祝祭を祝う 23 名の歌声が高らかに講堂に響き渡った<sup>②</sup>。

ウインドオーケストラは八木澤教司音楽学部准教授作曲による「愛の橋はここに架かりて」。神戸女学院創立 150 周年のキャッチフレーズ Bridging Generations にちなんで作られた 150 周年記念委嘱作品である。エキストラを含む総勢 68 名が愛と絆がテーマのポップな曲調の演奏を披露した。

最後のオーケストラは「神戸女学院卒業式のための行進曲 March for the Graduation Ceremony for the Kobe College」。1932 年 3 月 22 日の卒業式において初演されたヨーゼフ・ラスカ元本学音楽部教授 (Prof. Joseph Laska) 作曲の作品を、本学音楽学部ミュージック・クリエーション専攻卒業生・佐々比香莉氏によるオーケストラ版編曲により演奏した。エキストラを含む 39 名による演奏であった。

休憩を 15 分挟んで 15 時 30 分から第 3 部の記念講演に移った。神戸女学院大学名誉教授・内田 樹先生による「神戸女学院の擁護と顕彰」と題する講演であったが…。

マイクに向かって話をした人が皆、「150 周年おめでとう」と言っている。神戸女学院理事でもあるインサイダーの自分がおめでとうと言っているのか、誰に向かって言うのか、という問いかけから話は始まった。「おめでとう」は「場」に向かって言う祈りのようなものと解釈できる。故に「おめでとう」と言ってもいい。先ほどめぐみ会会長様の祝辞の中で「150 歳のおばあさん」という表現があったが、まさしく神戸女学院は一つの「生き物」であると言える。学校が「生き物」である、生命活動をしていると感じたのは神戸女学院が初めてで

ある。国公立出身の自分の体験からすると、誰もおめでとうと言わない、言ってもらえなかった、誰も学校を愛していなかったと思う。神戸女学院に来た時、神戸女学院のキャンパスは風水が良いと思った。最初の入学式の茂先生の祈禱で、初めて祝福を受けて衝撃を受けた。受け入れられた、招き入れられたと感じた。

校舎にも感動した。岡田山の校舎は声の響きを考えて設計されている。声を通り、いやな反響がない。音響を考えた素晴らしい設計である。故に学生たちの声、音、息遣いも聞こえる。小さな声を共有できる。声門が開く音が聞こえる。普通、学校建築では声の響きを考えて設計されていない。基本的に声を気にしていない。それに対してヴォーリズの校舎内では声を張り上げなくてもいい。生産的な絶句が可能である。ここに哲学がある。

また、校舎のあちこちにへこみがあったりして、ミステリー・ゾーンが存在する。1995年の阪神淡路大震災時に教職員でレスキュー隊を組織して全研究室に入ったが、一つとして同じ研究室はなかった。この校舎では一部を見てすべてを知った気になることはない。好奇心を刺激するものがあり、その先に別の世界が広がっている。これはヴォーリズの贈り物である。見慣れた風景の中から別の風景、価値を見出すことができる。人から教えられるのではなく、「自分で発見してね」というヴォーリズからのプレゼントは90年前から生きている。かつてコンサルタントがした「この土地を売れ、校舎には価値がない」という提言には断固反対した。

卒業生の遺贈がある。教育はもういない人々とまだいない人々と共に行なう集団の営みである。単数ではなく複数である。教育はMissionがあるから生きている。学校の生命体としての価値はここにある。教育は要不要ではない。「教えたい」が先にあり、「学びたい」はあとなのである。Missionとしての女子教育は必要である。女子教育にはそれにふさわしい場所がある。神戸女学院はそのトップランナーとなるべきであり、正しいMissionを行なえばそれは可能である。「神戸女学院は生き物である。私たちはその細胞である。」

16時20分、内田先生の講演は終了した。神戸女学院の持つMissionとそれを可能にするヴォーリズ校舎が、今も生き物としての学校であり続け、そこに

関わる私達一人一人がその細胞として育まれる。学校継続、展開に希望を抱かせるご講演であった。

立石先生から閉会の挨拶があった。挨拶用に原稿を用意してきたが、内田先生の話聞いた後では、これは駄目だと思ったと前置きした後、神戸女学院には自由な学生が多い、この教育の Mission をブレさせてはいけない、と締めくくられた。KCC とめぐみ会への感謝の言葉をもって閉会の挨拶は終わった。16時 25 分、記念式典は盛会のうちに無事終了した。

閉会后、17 時からめぐみ会主催でめぐみ会館において KCC 歓迎レセプションが開催された。

#### 註

- ① 式辞の全文は米津博子様の前掲原稿「神戸女学院創立 150 周年に寄せて—Ask what we can do for Kobe College—」参照。
- ② 女声合唱の詳細についてはなかにしあかね先生の前掲原稿「神をたたえよ 音高らかに」参照。

\* 記念式典、記念式、記念講演、記念演奏については『学報』第 200 号別冊（2026 年 3 月発行）に記事が掲載されている。

## アメリカからの来客

2025年10月12日(日)、神戸女学院創立150周年記念式典出席のためにアメリカから来日されたKCC関係者(元会長2名、現会長、元KCC推薦評議員)、ダッドレー先生ご親戚5名、デフォレスト先生ご親戚2名の計11名の歓迎行事が開かれ、昼食会、学内見学、茶話会が記念式の前行なわれた。来賓の方々は分刻みのスケジュールの中、図書館で開催中の神戸女学院創立150周年特別展示にも足を運ばれ、ダッドレー先生の机、デフォレスト先生の旅行鞆を始め、先生方ゆかりの品々や神戸女学院の歴史を示す展示品をご覧になり、記念式典終了後はめぐみ会館でめぐみ会主催の歓迎会に出席された。

翌13日(月)午後にはデフォレスト先生ご親戚のお二方がデフォレスト先生の居住しておられたケンウッド館を見た後、改めて図書館を再訪され、案内役の渡里明子理事長・院長室職員の説明で、デフォレスト先生のトランク、デフォレスト先生の書かれた蜘蛛の図とわらべ歌カード、英文神戸女学院75年史である*The History of Kobe College*をご覧になった。

来賓の方々は以下の通りである。

元KCC会長 Mr. Ed Grant, Ms. Terri Grant

ダッドレー先生親戚 Ms. Julia Vasser Samson & Mr. John Samson, Mr.  
Craig Holroyd & Ms. Patti Holroyd, Ms. Amy Duke

デフォレスト先生親戚 Ms. Charlotte Alexandre & Mr. Doug Alexandre

現KCC会長 大東由季様

元KCC推薦評議員 水野多美様

来賓の一人 Julia Vasser Samson さんは2016年にダッドレー先生ご愛用の机を学院にご寄贈くださった方である(詳しくは井出敦子「創立者ダッドレー先生遺愛の机の長い旅 太平洋を往復した机によって新たに結ばれた絆の記録」2017年3月発行『学院史料』第30号11ページから18ページ所収参考)。

## 神戸女学院創立 150 周年教職員礼拝

2025 年 10 月 12 日（日）、神戸女学院は創立 150 周年の朝を迎えた。記念式典の準備で関係者一同が忙しく学院内を動き回る中、ただ 1 か所、ソールチャペル内のみが静けさと落ち着きを保っているように見えた。2 階後方のパイプオルガンではなく、1 階前方に置かれているリードオルガンがゆっくりと前奏を奏で始める。このオルガンは 1860 年代製造の米国メーソン&ハムリン社製によるもので、山本通の礼拝で使われていた。その音色は移転当初のソールチャペルでの響きを思わせる。奏者は新 かほりチャプレン室職員である。

10 時 30 分、前奏に続いて一同で讃美歌 554 番を歌った。神のみ旨が形となったという歌詞がチャペル内に静かに満ちる。中野敬一学長・学院チャプレンが聖書の箇所を読み上げた。学院永久標語のもとになっているマタイによる福音書第 22 章 37 節から 39 節の聖句である。

「愛の継承」と題して中野先生が奨励をされた。本日、神戸女学院は創立 150 周年の記念日を迎えた。それぞれに思いがあり、感謝と喜びがある。ここで確認しておきたいことがある。それはこれまで神戸女学院が大切にしてきたもの、無数の人の思い、隣人への思い、願い、心、すなわち愛・アガペーである。神の愛は無条件の愛、見返りを求めない愛、人のために与える愛である。歴史を見てみると、確かに愛から外れていった時もあった。しかしそこから目覚めた人々がもう一度立ち返り、確認したのが愛神愛隣であり、それが宗教改革、ピューリタンの誕生、アメリカンボードの活動へとつながっている。アメリカンボードの活動は隣人のための愛の実践である。

神戸女学院は愛の実践の結晶といえる。神戸女学院での教育活動は愛を社会へと還元してきた。神戸女学院の存在理由は愛である。未来を生きる人のために注がれてきた。良い社会、世界を築くために愛の担い手を生み出していくこと、希望の光をつないでいくこと、愛を継承していくことが使命である。

最後に、神戸女学院が神の栄光を表すものとなりますようにとの祈祷をもって 10 時 45 分、教職員礼拝は終了した。式典準備中の慌ただしさの中、参会した 37 名はそれぞれに果たすべき役割の場へとチャペルを後にしていった。

## Bridging Generations

### —神戸女学院の 150 年と織りなす未来—

季節外れの陽気の中、2023 年から連続して開催してきた創立 150 周年記念展示の最後を飾る神戸女学院創立 150 周年記念展示 III「Bridging Generations—神戸女学院の 150 年と織りなす未来—」幕開けを告げるオープニングセレモニーが 2025 年 5 月 20 日（火）11 時 15 分から図書館本館ホールにて行なわれた。

松永千香理事長・院長室課長の司会の下、黙禱を持って開会。中野敬一学院チャプレンによって聖書（ヨハネによる福音書 8 章 32 節）が朗読され、短い祈禱が捧げられた。神戸女学院 150 年の恵みを深く覚え、人々の交流を通して未来への良き希望を抱くことができるように、と。

続いて司会者から来賓の紹介があった。株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所顧問・中山献児様。ヴォーリズ建築事務所からは今回の展示にヴォーリズ直筆のスケッチ等をお借りしている。公益社団法人神戸女学院めぐみ会会長・米津博子様、副会長・川寄敏子様、副会長・平尾美澄様。めぐみ会からは『めぐみ』誌発行許可状等の資料をお借りしている。

飯 謙理事長・院長は挨拶の中で、150 周年を迎えるにあたって図書館に 3 年計画で展示を依頼したことに触れ、感謝を述べられた。神戸女学院の歴史は遡ればイエス様からということになるが、今回は宣教師を派遣したアメリカンボードを出発点にしており、学校単体の歴史ではなく、多くの人々の参与が神戸女学院となっていることを示す展示となっている。そして今回、展示協力に日活が入っているのは、北寮で撮影された映画があるからで、その部分を映像で見ただけ。この展示を通して新たな思いと交流が生まれることを願っている。

展示構成と見どころについて竹中園子図書館課長から紹介があった。卒業生からメッセージをいただいている。神戸女学院の歴史的背景を伝えられる山本

通キャンパス、岡田山キャンパス、そして未来へとつながる歴史を辿る展示構成となっている。見どころの一つは、宣教師の日本語教師で捕らえられ獄死した市川榮之助が所持していた中で現存する手書き聖書、また、日本の讚美歌コレクションであるオルチン文庫から 12 冊。いずれもレプリカを展示している。ヴォーリズ直筆のラフスケッチ、設計図からはキャンパス設計の過程を見ただけ。映像コーナーでは日活映画 8 分間を上映している。この展示を通して、神戸女学院に捧げられた祈りと支援を感じてもらえたら幸いである。

黙禱をもって閉会、来賓は図書館員の説明を受けながら展示を見学した。

参加者は来賓、学院教職員を含めて 17 名であった。

展示は 2025 年 5 月 20 日から 7 月 19 日まで図書館本館ホールと閲覧室にて開催された。主な展示品は以下の通りである。

神戸居留地パノラマ写真（1879 年頃）、切支丹禁制の高札（大、小）、伝・グリーン所用説教台、市川榮之助筆写聖書『約翰傳福音書』（レプリカ）、ダッドレー先生使用の机と椅子、松山高吉『旅日記』、ヴォーリズ氏直筆による岡田山キャンパス配置検討案・理学館平面図スケッチほか（株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所所蔵）、『めぐみ』発行許可書（公益社団法人神戸女学院めぐみ会所蔵）、小磯良平画「タルカット像」（レプリカ）

この展示のために特別協力をしてくださったのは、株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所、株式会社竹中工務店、株式会社日建設計、日活株式会社、公益社団法人神戸女学院めぐみ会である。改めて感謝申し上げます。

展示期間中に一日だけの特別展示が行なわれた。2025 年 5 月 31 日（土）、神戸女学院において神戸女学院・日本聖書協会創立 150 周年記念講演会が開催され、これに合わせて展示品に特別な資料が加えられ、参加者に公開されたのである。特別展示品は、一般財団法人日本聖書協会所蔵の資料 3 点、神戸女学院所蔵の松山高吉文庫資料 10 点と讚美歌資料 2 点の計 16 点であった。

会期中の来場者は 1,820 名、うち学外者は 1,327 名を数える。一般公開日は愛校バザーの日を含めて 16 日、その他前述した日本聖書協会講演会、家庭会保護者会及び幹事会、キャンパス見学会でキャンパスを訪れた人々も来場している。

これに加えて、神戸女学院創立 150 周年記念式典に合わせて 2025 年 10 月 12 日から 16 日に、7 月 19 日に会期を終えた展示の一部を入れ替えて「神戸女学院創立 150 周年記念資料展示」を図書館本館で行なった。式典当日は小雨がぱらつく時間もあるあいにくの天気であったが、記念式典参加者は午後からの式典の前に三々五々展示の見学に図書館本館を訪れ、展示に見入っていた。

創立 150 周年を記念する展示ということで、5 月 20 日から 10 月 16 日まで展示を行なっている期間を通じて、各方面で活躍されている同窓生から創立 150 周年特設サイトに寄せられた応援メッセージをパネルにして展示するコーナーを設けていた。ご本人に加えて友人、知人がパネルを見つけて談笑する姿が垣間見られた。

メッセージを寄せてくださったのは以下の方々である（創立 150 周年特設サイト掲載順）。

**伊藤紀美子 様**

田嶋株式会社代表取締役社長、神戸商工会議所副会頭

神戸女学院大学文学部英文学科卒業

神戸女学院の創立 150 周年を心からお喜び申し上げます。

振り返りますと大学の 4 年間、この緑豊かな岡田山のキャンパスで過ごした日々が走馬灯のように懐かしく思い出されます。岡田山の豊かな自然に囲まれ美しいヴォーリズ建築の学舎で学べたこと、いまさらながら幸せな学生生活であったと感謝の気持ちでいっぱいです。

創立 150 周年目の節目に向けて国際学部、心理学部の新設、また再整備による新棟の建設等、新たな取り組みがなされました。女子大を取り巻く環境が大きく変わりつつある中で、伝統を大切にしながらも未来を見据えた画期的な取り組みを大変心強く思っております。2024 年度の大学入試では志願者数、入学者数とも前年度を大きく上回ったという嬉しいニュースが聞きました。多様性が重視される今後の社会で個人の資質を活かしながら「愛神愛隣」の精神の元豊かな人間性をはぐくみ社会に貢献できる女性リーダーの育成を期待しております。神戸女学院の今後の益々のご発展をお祈り申し上げます。

**フォーリー 淳子 様** 大同門株式会社代表取締役社長、関西経済同友会常任幹事、  
日本国際博覧会協会理事

神戸女学院高等学部、神戸女学院大学文学部英文学科卒業

毎朝の礼拝、新緑の愛校バザー、秋の体育祭など、神戸女学院の思い出はつきません。振り返る今、女学院の良さとは、生徒一人ひとりが自律で自由に育まれる心を育む校風であると思っています。また、「愛神愛隣」の精神は、自分とは異なる考え方や文化の人も受け入れるという多様性を知る心を教えてくれたと思っています。実業界に女性として身を置く現在の私にとっても、とても大事な心の基礎となっています。創立 150 周年という節目に当たり、今後も本校が、ここに連なる全ての女性に、どんな夢にも挑戦し続ける勇気と、その夢を実現させる力を与える場所であり続けることを願います。150 年の歴史を背負い、新しい時代への扉を開く神戸女学院のさらなる発展をお祈りするとともに、その伝統をつぐ全ての人の未来に心からのエールを送りたいと思います。

**正木 靖子 様** 弁護士、KC 法曹会会長、日弁連元副会長  
神戸女学院高等学部卒業

私は、弁護士として 40 年余、その使命である人権の擁護と社会正義の実現を願い、微力ではありますが、頑張ってきました。

女学院では、春の桜に始まり、四季折々の美しい自然のなかで、自由と個々の生徒の尊厳を大切にしながら、のびやかに育てていただきました。人権の擁護や社会正義の実現を使命とする職業を目指そうとした原点は女学院での学びにあったのだろうと思っています。

そして、多感な思春期における、朝の礼拝からの学び、愛神愛隣の精神の育みは、私が弁護士として仕事をするうえで、「人に優しく」ありたいという思いを持ち続ける支えであったように思います。

本学院が、いつの時代にあっても、魅力的な教育の場であることをお祈りします。

**廣瀬 恭子 様**

株式会社廣瀬製作所代表取締役社長、大阪商工会議所副会頭  
神戸女学院高等学部、神戸女学院大学文学部英文学科卒業

神戸女学院が創立 150 周年を迎えられますことを心よりお慶び申し上げます。  
卒業から 40 年以上経ちますが、今でも、朝の礼拝、讃美歌、お世話になった先生方、先輩、同級生、美しい岡田山のキャンパスが懐かしく思い出されます。  
神戸女学院では中高大を通して、「愛神愛隣」をモットーに、自由な校風の中で主体性を重んじる教育を受けました。仕事でも、女学院で育まれた主体性、チャレンジ精神、多様性を受け入れ他者を敬う心が糧となっており、神戸女学院で学べたことに感謝しております。

現在、世界はデジタル化、AI、環境、多様性への対応等、大きく変化し、更なる女性の活躍が期待されております。今後とも神戸女学院生が世界で社会に貢献されることを願っております。良き伝統を守りながら、社会の変化に応じて変革を進める神戸女学院が、150 周年を機に更に発展されますよう心よりお祈り申し上げます。

**吉田 麻美 様**

藍野病院副院長、大阪医科薬科大学内科学 I 臨床教育教授、KC  
Medical 会長  
神戸女学院高等学部卒業

150 周年おめでとうございます。

100 周年時に中学部に入学させていただき半世紀、美しい岡田山で学んだ 6 年間は、かけがえのない心の糧で、医師として歩む原点です。一番の思い出は黄色の学年で V4 を達成できた体育祭。バザーや文化祭など行事やクラブ活動の多くは自分達に任せ、主体的に考え、協調して目標を達成する、強くて柔軟なリーダーシップを育てていただきました。「愛神愛隣」のモットーのもと、毎朝礼拝ではじまり、「いのち」について考える多くの機会は、いつも臨床の場で大きな力となっています。

そんな「人間力」を育くむ神戸女学院に感謝、女性の活躍が望まれる今、社会に貢献できる多くの人材を輩出され、更なるご発展を祈念申し上げます。

## 十合 翔子 様

声楽家(オペラ歌手)、新国立劇場オペラ研修所第19期生修了、  
令和元年度文化庁新進芸術家海外研究員として渡伊  
神戸女学院大学音楽学部音楽学科声楽専攻卒業

神戸女学院が創立150周年を迎えられますこと、心よりお慶び申し上げます。  
美しいキャンパスは感性を養うだけでなく、時に心を癒し、励ましてくれました。  
日々研鑽を積んだ音楽館や講堂の響きはとても素晴らしく、海外での研修  
を経て再び母校を訪れた際、どれほど恵まれた環境であったかを改めて実感致  
しました。また、礼拝や他学部の授業を率先して受講した経験は私の視野を広  
げ、様々な視点から物事を見る習慣ができました。神戸女学院での学びは、私  
にとって大切な宝物であり、確かな核となっております。

これからも伝統あるキャンパスから皆様が未来へ大きく羽ばたいていかれます  
よう、そして神戸女学院の更なる発展を心よりお祈り申し上げます。

## 玉岡かおる 様

作家、大阪芸術大学文芸学科教授  
神戸女学院大学文学部社会学科卒業

創立150年の歴史をことほいで

150周年、まことにおめでとうござります。

母校がこれほど長い歳月、変わることなくあり続けてくださったことに感謝し  
ます。

母娘二代で美しい岡田山キャンパスで青春を過ごせた幸せ。そして作家となっ  
て、先輩諸姉の強靱な生き方を小説に残せた幸せ。

女流作家の草分けを目指すヒロインを描いた『銀のみち一条』も、建築家ヴォ  
ーリズの妻を描いた『負けんとき』も、私の中に流れる学校の精神が書かせた  
作品といえます。

## 久山 葉子 様

翻訳家、エッセイスト  
神戸女学院高等学部、神戸女学院大学文学部英文学科卒業

多くの方々の献身により150周年を迎えられたことを心よりお喜び申し上げ  
ます。

祖母そして母もお世話になった神戸女学院に入学できた時は感動もひとしおでした。スウェーデンに住んで 14 年になりますが、移住当初から違和感なく暮らせたのは、女学院での 10 年間で身につけたキリスト教の精神、国際感覚、人権への意識、そしてハイレベルな英語教育のおかげです。

スウェーデンは女性の活躍度が高い国ですが、日本では女学院の同級生や先輩後輩がロールモデルとして大きな影響を与えている姿を見て、私も日々インスピレーションをもらっています。

今後も日本の未来を担う人材を続々と輩出されることを願っています。

## 與那嶺恵理 様

自転車選手、2016 年リオデジャネイロオリンピック・2021 年東京オリンピック・2024 年パリオリンピック出場、2022 年ツール・フェミナン・アンテルナショナル・デ・ピレネー2 位  
神戸女学院高等学部卒業

自転車女子ロードレースの日本代表としてパリオリンピックを終え、オーストリアチロルでの生活が始まっています。

150 周年、本当におめでとうございます。

私は女学院生では、多分唯一のプロアスリートとして、リオ、東京そして、今回のパリと 3 回のオリンピックに出場することが出来ました。

ヨーロッパでのプロ生活も 8 年目を迎え、女学院で多くの学友、そして先生らと過ごした日常の全てが今の私の血肉になっていると、日々日々感じております。中学部、高等学部で学んだ 6 年間で今振り返ってもかけがえのない、愛に溢れた日々でした。

## 愛神愛隣

神戸女学院中学部、高等学部で学んだ日々が私を創りました。

そして、私の心にはいつも礼拝でのこの言葉があります。

「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。」

これからも未来を創る、個性豊かな集まりである女学院でありますように。

本当におめでとうございます。

**澤田 拓子 様**

塩野義製薬株式会社取締役副会長、関西経済連合会副会長

神戸女学院高等学部卒業

神戸女学院創立 150 周年心からお祝い申し上げます。

神戸女学院の中高部に通っていた頃を思い出すと、やはり礼拝で一日が始まること、美しい自然に囲まれ芝生の上でも留学生を含む友人たちと多くの時間を過ごせていたこと、自由自律の気風が特徴としてあげられるのではないかと思います。今、世界は球温暖化をはじめ多くの課題を抱えています。これらの社会的課題を解決していく上で、既存の枠組みに囚われず、自由に自律的にイノベーションを起こしていくことが求められる訳ですが、その観点から見ると神戸女学院の自然に囲まれた中で多様な方々と一緒にそれぞれの長所を認め合いつつ自ら歩みを進めて行ける環境は非常に貴重だと思います。是非、この経験を活かして世界に羽ばたいて下さい。

**有働由美子 様**

アナウンサー

神戸女学院大学文学部総合文化学科卒業

創立 150 周年、なんという歴史のある学校を卒業させていただけたのかと、あらためて誇りに思います。本当におめでとうございます。

大学時代は、とにかく楽しみました。授業も大学祭実行委員会も、あの美しい図書館も礼拝堂も。半世紀生きた人生の中でも温かく包まれるような日々でした。学生時代って楽しい一方、経験したことの無い社会への不安もあると思います。でも、なんとかなる、と思っていたらなんとかなるものです。どうぞ未来を恐れず、侮らず、そのためにも、「今」を本気で、本当の意味で楽しんでください。応援しています。

**平村 香月 様**

読売テレビ放送報道局プロデューサー・ディレクター

神戸女学院高等学部卒業

「これまでは答えを探す日々だったが、これからは問いを探す日々が始まる」。高等学部の卒業前、社会の授業で先生から贈られた言葉が強く心に残っています。毎朝の礼拝で社会貢献に励む人々の多様な経験談に触れ、報道の仕事を選

びました。報道の役割は社会の死角に切り込み弱い立場の人々に光を当てることです。世の中には白か黒では割り切れない矛盾が溢れ、まさに問いを探す日々ですが、岡田山で学んだ自分の頭で考え続ける力と他者のために生きる心が私を支えてくれています。後輩の皆さんには門をたたけば開かれる場所で得た探究心を力に変え、“誰かのため”に生きる喜びを見つけられるよう願っています。神戸女学院の益々のご発展を祈念しています。

**武内 陶子 様**                      アナウンサー

神戸女学院大学文学部総合文化学科卒業

神戸女学院 150 周年おめでとうございます。そして震災などいろいろな困難を乗り越えて今なおそこに在り続けてくれる母校、私たちが帰る場所が変わらずそこにあることに心からの感謝を捧げます。私が入学した 85 年はバブルの香り漂う時代でしたが、緑豊かな、「たぬきが住んでいる」と噂される岡田山を初めて登り、あまりにも美しい女学院の建物を目にした時の気持ちの高揚を今でもありありと思い出します。「ここで学びたい」と直感的に思い、それが叶いました。一生の友となる友人たちとの出会いも含め、豊かな学びを提供してくれた神戸女学院。一年一年積み重ねられたこの 150 年に思いを馳せ、未来へ続く道に心を重ねたいと思います。

**万代 道子 様**                      神戸市立神戸アイセンター病院、研究センター長

神戸女学院高等学部卒業

神戸女学院創立 150 周年、心からお喜び申し上げます。  
初めて母校に足を踏み入れて、海外の小説にでてきそうな別世界に感動した日のことを今も鮮明に覚えています。入学して手にした聖書と讃美歌。パイプオルガンの響き。芝生の校庭。何もかもが新鮮でした。  
学生の頃は当たり前で卒業後喪失感が強かったもの。毎朝歌う讃美歌。女学院では「歌うこと」は日常で、ずっと歌い通しのクリスマス讃美歌礼拝は最高でした。そしてイベント毎に余興で行われていた「スタンツ」。その場で作って演じる寸劇がどれも秀逸な出来で、見るのも演じるのも本当楽しかった。自由で

自主性を重んじる校風と共に、素晴らしい文化だったと思います。

卒業後、活きているものといえば、やはり英語教育。英米文学やマザーグースなど、文化と一緒に語学を学ぶことで世界が広がり、私たちは国際社会の一員、みたいな意識がなんとなく刷り込まれたと思います。あとは、女性だからといって特に引け目を感じないところでしょうか。卒業後も優秀でプロフェッショナルな女性の方々に囲まれて働いています。

学生の間はあまりに日常でその魅力を忘れがちですが、女学院生活は唯一無二の経験でした。今後もこの学校で皆さんが豊かな成長期を過ごされることを心より願っています！

### 齊藤 言子 様

声楽家、クラブファンタジー会長、神戸女学院大学元学長・名誉教授

神戸女学院大学音楽学部音楽学科声楽専攻卒業

神戸女学院創立 150 周年の歴史の中で、大学生、教員として 50 年以上を共に歩ませていただきました。

神様の愛に包まれ、日本一美しいキャンパスに囲まれ、多くの教職員の方々に育てて頂き、一生の宝となるかけがえのない友人たちに出会い、なんと心豊かな贅沢な時間であったかと改めて感謝と共に感慨深く振り返っています。

今は教員として様々な学生達と関わらせて頂いておりますが、未だ私も共に成長させていただいている日々です。彼女たちは、入学時はそれなりにあらあら？と感じる事もありますが、卒業式にはみんな！なんて素敵なレディになったのかしらと感無量になります。

キリスト教主義が学院の歩みの根幹ではありますが、関わるすべての人が信仰を持っているわけではありません。が、礼拝形式で行われる各行事や礼拝時に流れてくる讃美歌やオルガンの音は知らず知らずのうちに心の奥に染み込んで、苦しい時、悲しい時には、改めて神様からの守りと救いを感じ支えられ、与えられた道しるべとして人生の荒波を乗り越えていくことができているのではないのでしょうか。

そうやって皆が幸せに導かれていく。神戸女学院とはそういう学校です。

**北川ペドロソ 実萌 様** 特定非営利活動法人 immi lab 代表理事

神戸女学院高等学部卒業

神戸女学院創立 150 周年おめでとうございます。

中高部時代は友人たちとふざけあい、先生方にも生意気な態度をよく取っていました。

でもそうして築いた関係性や友情、そして礼拝で聞いた言葉、部活や課外活動での経験—

それらは卒業後、私の生き方に大きな影響を与えました。感謝しています。

愛神愛隣の本質には、大きな困難に直面してからしか分からない側面があると思います。

中高時代にそれに触れられる神戸女学院は、改めて、凄い。

今後も心豊かな若者が育つ場となりますように。

**岡崎 成子 様** 株式会社フジシールインターナショナル取締役代表執行役社長 CEO

神戸女学院大学文学部英文学科卒業

創立 150 周年おめでとうございます。

150 年前は 1875 年明治 8 年、明治維新直後であり、近代日本設立の真っ只中という時期です。

大正、昭和、平成そして令和という激動の 150 年。

神戸女学院は、その時代時代の女学生を教育し世の中に送り出してきたのです。

なんと意義深く輝かしいことでしょう！ 教育の意義、社会の価値観、産業の変化、そして何よりも女性の立場が大きく変化してきた 150 年でもありました。

理念は変えず、時代の要請に柔軟に対応し変化してきたからこそ、今日もそして今後も私たちの母校があり続けることができるのです。

私自身の生きざま、現在の仕事にも、神戸女学院の歴史の一員であったことは確実に活かされています。

歴代の教職員の方々、同窓生に感謝申し上げるとともに、現在・未来の教職員の方々、在校生、そして未来の学生となる皆さんにも大きなエールを送ります。

## 濱田 あや 様

チェンバロ奏者

神戸女学院高等学部、神戸女学院大学音楽学部音楽学科器楽専攻卒業

神戸女学院創立 150 周年、心よりお慶び申し上げます。

私はチェンバロ奏者として、主に 17 ～ 18 世紀のバロック音楽を演奏しています。クラシック演奏家として大切にしているのは、伝統を尊び、先人が残した作品に自らの個性を反映させ、情熱をもって表現することです。こうした音楽への向き合い方は、神戸女学院での学びを通して培われた精神と深く結びついていると感じています。

中高部での 6 年間では、活発な同級生に囲まれて、自発的に行動する力や探求心が養われました。初めて礼拝でオルガン奏楽を担当したときの、清らかで心が温かく満たされるような気持ちは、今でも私の原点として深く心に刻まれています。

大学では、専攻の音楽に限らず、外国語や文学、美術など幅広い分野を学修することによって見聞を広げ、その学びが卒業後の海外生活への適応や、自分の信じる道を歩み続ける力へと繋がりました。

来日公演のたびに駆けつけてくれる同窓生や先生方の温かさに支えられ、また「めぐみ会ニューヨーク支部」にも長年お世話になっており、神戸女学院の固い絆にいつも感謝しています。神戸女学院の良き伝統が末永く受け継がれますように、そしてこの美しい学び舎から未来を担う若い才能が大きく生まれ、それぞれの魅力を輝かせながら世界に羽ばたいていくことを心から願っています。

## 三宅 麻希 様

四天王寺大学准教授

神戸女学院高等学部、神戸女学院大学人間科学部人間科学科卒業、人間科学研究科人間科学専攻博士前期課程修了

150 周年、おめでとうございます。

中高部では毎朝の礼拝で尊いお仕事をされている諸先輩方のお話に触れ、私もいつか人の役に立つ仕事がしたいと憧れました。行事や課外活動では愛神愛隣の精神を体感しました。大学では専門の臨床心理学以外にジェンダーの心理学

や女性学に触れ、社会を生き、働く中で、女性だからこそ感じる違和感に向き合いつつ、自分はどう生きたいのか考え行動することができています。振り返ってみれば、生きづらさを抱える人々の経験を少しでも理解し、新しく生きるためのお手伝いがしたい、もっと何か自分にできることがあるのではないかと問い続けることができるのは母校で過ごした日々のおかげなのかもしれません。

**夫 貴代 様** 会社員・グラフィックデザイナー、150周年記念ロゴマーク最優秀賞受賞  
神戸女学院高等学部卒業

創立150周年おめでとうございます。

今回、周年記念ロゴの作成者として母校の節目に関わる事ができ、非常に嬉しく思います。

在籍していた中高時代は、美しいキャンパスや愉快的な友人に囲まれ、素晴らしい6年間を過ごしました。

そして社会に出てから、改めてその環境がいかに快適なものであったかを実感しております。

母校で培った、他者の個性を尊重する姿勢、物事を推進する力、自由な探究心は今でも自分の日々に生きており、大きな財産です。

今在校している皆様も、限られた時期を楽しく過ごせますように！

神戸女学院のますますの発展をお祈りするとともにいつまでも心のよりどころとして、そこにあり続けていただけたら嬉しいです。

**E112回卒業生 T 様** 警察官（大阪府、現警察庁）

神戸女学院大学文学部英文学科卒業

神戸女学院での思い出は、友人らと過ごした時間です。卒業してからそれぞれの道を歩みだしてからは、会う機会が減ってしまいましたが、久しぶりに再会したら不思議と大学時代に一瞬で戻ります。

社会人になると様々な迷いや悩みが生じます。自分は何のために仕事をしているのかと自問自答することが多々ありましたが、原点に戻りなぜこの道を進ん

でいるのかと考えたときに、自分は人の為に奉仕しているという事に気付くことがありました。それは神戸女学院大学での学びのお陰だと思っています。

**恒川 久美 様** 株式会社ANA総合研究所産学連携部兼地域連携部主席研究員  
神戸女学院大学文学部英文学科卒業

創立 150 周年、誠におめでとうございます。

記念すべき 2025 年に客室乗務員として初めて黄綬褒章を頂いたことも、神戸女学院とのご縁と名誉を感じております。

坂を上り切り前に見える凜と建つ音楽館、更衣室、デフォレスト館を通して重要文化財の文学館でハイヒールについて叱られる。ライラックで講義の感想を交わし合い、できたばかりの Shakespeare Garden を横目に次の講義に向かう。この学び舎での日々が、現在の私の自信と誇りにつながっています。

語学や Shakespeare を学んだというより、その読み方、感じ方、美しさの鑑賞の仕方を身に付けることのできた 4 年間は、その後出会うすべての物事に向き合うプロセス、ひとつの道を最後までやり遂げる力を与えてくれたと思っています。

**宋 美玄 様** 産婦人科医、丸の内の森レディースクリニック院長、医学博士  
神戸女学院高等学部卒業

神戸女学院で過ごした 6 年間は私の人生にとって宝物のような時間でした。程よい自由と刺激、深く分かり合える仲間たち、素晴らしいキャンパス。こんないい学校は他にないと思います。

それほど信心深かった訳ではありませんが、キリスト教の精神は自然と心の柱になっていると思います。私は今、産婦人科医師として日々診療し、SRHR(セクシャル・リプロダクティブ・ヘルス/ ライツ、からだの自己決定権)の普及と啓発のためにインフルエンサーの仕事もしています。多くの人に、あなたに体のことを自由に決める権利があり、同時に、あなた以外の人にも一人一人にその権利がある、ということをいつも伝えていきます。これはまさに神戸女学院の愛神愛隣の精神と通じると思います。

神戸女学院で学んだことを心の柱に、これからも自分の置かれた場所でできることをしていきたいです。

**米田 あゆ 様**      宇宙航空研究開発機構（JAXA）宇宙飛行士  
神戸女学院高等学部卒業

神戸女学院創立 150 周年、誠におめでとうございます。

岡田山の緑、講堂に響く讃美歌、先生方の温かな導き、友人や先輩との出会い、そして日々の生活の中にある自発的な探求の場。

その一つひとつがわたしの原点です。

まわりの人々や環境に感謝し、困難なときには互いに支え合い、新しい門をたたき挑戦することを讃えあう。そのような女学院に受け継がれる精神から、私は今も勇気をいただいています。感謝しています。

どうか皆さんも、勇気をもって門をたたき、新たな一步を踏み出してください。その歩みは女学院で培った精神に支えられ、そしてあなたの挑戦はまた誰かに希望を届け、よりよい社会に向かって未来がさらに開かれていくと信じています。いつの日か宇宙から、岡田山の豊かな自然を眺め、学び舎で過ごす皆さんに想いを馳せることを楽しみにしています。

150 年の歴史が紡いできた光が、これからも次の世代を導き続けますように。

\* 神戸女学院創立 150 周年記念展示 III については『学報』第 200 号（2025 年 7 月 10 日発行）に記事が掲載されている。また、記念展示 I については『学報』第 198 号（2023 年 7 月 13 日発行）に、記念展示 II については『学報』第 199 号（2024 年 7 月 11 日発行）に、記念展示全体を総括する記事も『学報』第 200 号別冊（2026 年 3 月発行）に掲載されている。

## 神戸女学院創立150周年記念創立者記念日礼拝(神戸教会)

神戸女学院創立 150 周年記念創立者記念日礼拝が 2025 年 5 月 22 日(木) 13 時 20 分から 13 時 50 分、神戸教会において守られた。

中央講壇の前に置かれた祭壇には、タルカット先生の肖像画(小磯良平画伯によるタルカット像復元レプリカのコピー)が、2 束の白と青を基調にした慎ましやかな花束に囲まれるようにして置かれている。会堂には同窓生、現旧教職員等 63 名の懐かしい顔ぶれが集い、旧交を温めている姿が見られた。

例年、神戸修法ヶ原の外国人墓地にあるタルカット先生の墓前で行なわれる礼拝が、今年は 150 周年ということで特別に神戸教会をお借りして守られた。狭い墓前で起立したまま行なっていたものが、空調の効いた教会内で着席で実施されたことは参会者にとって、礼拝により集中でき、このような形でタルカット先生に思いを馳せる時間が持てたことは幸いである。

片桐聖子氏のオルガンの前奏に続いて、一同で讃美歌 90 番を唱和した。司式は中野敬一学院チャプレンである。聖書の箇所はタラントンのたとえ話が書かれているマタイによる福音書 25 章 14 節から 21 節、続く中野先生の説教「WELL DONE GOOD AND FAITHFUL SERVANT」は、まさしくその箇所がモチーフである。

本日、5 月 22 日は創立者記念日その日に当たり、中高大でも礼拝を行なったが、今年は創立 150 周年ということで特別に神戸教会でも礼拝を守っている。これまでの歩みを支えてくださった神様に感謝する。そしてこの歩みの先に未来がある。タルカット先生の生涯を覚え、神様のめぐみを覚える時としたい。

改めてタルカット先生の生涯を簡単に辿ってみたい。先生は家族、隣人のために奉仕をした後、宣教師となり来日した。神戸女学院を創立し、学校を離れ

その後岡山に転任したが、その後、鳥取や京都など様々な場所で活動した。「元来根付いたところから引き抜かれ、たびたび植え替えられるのが私の運命であるらしい」とご自身でおっしゃっているように\*、生涯を日本のために尽くされた。「この方を知ることができて良かった」と言われる人であり、自らにふさわしいタラントンを用いて多くの人々を支えた先生の生涯は「愛神愛隣」が形になっているといえる。

こうしてタルカット先生のことを振り返る意義を考え、奉仕できる人となるようにとの祈禱のあと讃美歌 502 番を歌い、主の祈りを唱え、頌栄 541 番を歌った。歌詞はすべて参会者のほとんどがなじみのある 1954 年版が用いられた。歌はコーラスとなり、会堂内に美しく響いた。

飯 謙理事長・院長は挨拶の中で、神戸教会牧師・大垣先生、宣教師・キム先生に感謝を述べられた。150 周年を迎えた神戸女学院の創立者記念日礼拝を西日本最初の現存する教会で守れたことは意義深い。湊川神社の宮司がスパイとなって出席した神戸教会の前身である元町講義所の記録が残っている。会堂は 1888 年に移転したが、タルカット先生も神戸教会の礼拝に出席したはずである。1931 年に現会堂に建て替えられた際に旧会堂の欄干をソールチャペルにいただいた。このように足跡をたどることができる。

最後に一同で学院歌を歌って礼拝を終えた。

松永千香理事長・院長室課長から図書館で開催中の神戸女学院創立 150 周年記念展示の案内があった。

ここで参会者は解散となり、墓前礼拝参加者 20 名は 14 時に教会前からマイクロバスで外国人墓地に移動した。

バスは市街地を抜け、山の中へと入っていった。心配された天気もここ数日の真夏を思わせる気候とは違い、薄日が差すさわやかな陽気であった。修法ヶ原外国人墓地にあるタルカット先生の墓前で 14 時 45 分から短く礼拝が持たれた。讃美歌 90 番を歌い、中野先生による新たな思いで多くの方に続く者とな

りますようにとの祈禱の後、5分ほど周辺を散策した。緑の美しい木陰で学生時代の墓前礼拝のこと、恩師のエピソードなど、同窓生が語る言葉が静かに流れるひと時であった。最後に讃美歌 502 番を歌って、大門光歩中高部チャプレンが祈禱を捧げた。これまでの歴史は先人の祈りによって紡がれてきた。中高大一体となって教育の使命を果たせるように、と。タルカット先生のお墓を囲んで記念撮影をした。

15時15分、墓地を後にし、市街へと戻ってきた。神港高等学校近くで散会となり、このあと表敬訪問参加者はバスを降りて歩いて学校に向かった。

校長、事務長の出迎えを受け、歓談の時を持った。1964年まで山本通旧キャンパスの旧講堂は現存していたそうで、通された部屋には1960年のキャンパスの写真が飾ってあり、講堂の姿を確認することができた。その後、北門（裏門）の門柱が区画整備のため撤去される際に連絡をいただき、それを譲り受けて移設、現在は岡田山キャンパス正門左手奥の道沿いの門柱となっている。

現在の窓越しに見た正面からの景色は、建物は違えど、実際の校地内の高低差を目の当たりにし、古い写真に写っている講堂横の築山の景色を思い描くには充分であった。また、敷地内に置かせていただいている「神戸女学院創設の地」の碑を間近で見ることができた。神港高等学校を訪れたのは同窓生、教職員13名であった。16時30分、現地解散。

\*横川四十八著「偉人タルカット女史」参照（1987年3月発行『学院史料』第5号に再録あり）

\*創立者記念日礼拝及び墓前礼拝については『学報』第200号別冊（2026年3月）発行に記事の掲載あり。

## 「近代日本の文化形成と未来へのまなざし—聖書翻訳の貢献」

神戸女学院と日本聖書協会は共に 2025 年創立 150 周年を迎えるにあたって共催で講演会を開催する運びとなった。

2025 年 5 月 31 日（土）、不安定な天候が続き、雨も心配されたが、当日は天気にも恵まれ、13 時から神戸女学院大学文学館 28 室において神戸女学院・日本聖書協会創立 150 周年記念講演会「近代日本の文化形成と未来へのまなざし—聖書翻訳の貢献」が開催された。

中野敬一神戸女学院大学学長・学院チャプレンの、今日ある幸いを覚え、感謝し、神の言葉を人々に伝える使命をこれからも担っていけるようにとの祈禱によって開会した。

主催者を代表して日本聖書協会・具志堅聖総主事が挨拶された。聖書普及事業を開始した 1875 年が日本聖書協会の始まりであり、今日まで 150 年の歴史を重ねてきた。これまでに 4 つの翻訳（文語訳、口語訳、新共同訳、聖書協会共同訳）を刊行してきた。それぞれの訳はその時代の英知の結晶といえる。現在、4 訳対訳の詩編を編集中である。聖書の翻訳が残した足跡を感じていただければと思う。

次に会場校を代表して飯 謙神戸女学院院長が挨拶した。聖書翻訳の中心人物となった松山高吉は、アメリカンボードの宣教師たちが神戸・宇治野で始めた英学校に来ていた。その後、神戸教会創立メンバーとなり、神戸女学院で教師も務め、聖書の翻訳に携わっていく。松山は聖書協会と神戸女学院をつなぐ存在である。聖書翻訳を通して近代日本の精神の基礎が作られていったと言われている。新たな視点でそれを検証していきたいと思う。神戸女学院では 2025 年度から聖書協会共同訳聖書を使っている。これは松山の仕事をリニューアルする営みといえる。神戸女学院には松山の息女で神戸女学院教師でもあった松山初子先生から寄贈された資料がある。

13時18分から講演に移った。総合司会の藏中さやか文学部教授から講師・大澤 香文学部准教授の紹介があった。大澤先生は聖書協会共同訳では言語を担当された。「新しい時空を拓いて―明治元訳・大正改訳の『視よ』に着目して―」と題して画像を用いて話された。

聖書翻訳と神戸女学院の歴史を見てみると、神戸女学院における英語教育は聖書を読むために必要であった。神戸女学院の教育は聖書翻訳とかがわりがあったということがわかる。聖書翻訳は宣教師主導で開始されたが、日本人が深くかがわり、言語、思想に影響を与えたと言われている。今回は「視よ」と訳されている単語に注目して明治元訳以降の動きを辿っていきたい。特徴として「視よ」は改訳が進むにしたがって増えていくという点を挙げておきたい。松山は明治元訳、大正改訳の両方に唯一かがわっている。神戸女学院所蔵松山高吉文庫資料では、原稿の段階で「視よ」の訳出・訂正が見られるが、委員会で相談があったかは不明である。しかし『マコ伝福音書』の頃にはこの訳出については議論の余地なしと思われていたようである。

「視よ」については、植村正久が言文一致と評価しているが、それだけではなく、それとは別の方向性ありとして画期的とみている。それは「原文の語勢」をよく伝えているということである。「視よ」と訳出されている単語は、語り手による聞き手（読み手）への注意喚起であり、訳出されない方が自然な場合もある。この単語はテキストとの会話、出会いであり、視点の切り換えという役割を担っている。聖書を通しての神の呼びかけを感じたい。

13時48分から主題講演となった。司会者から講師の紹介があった。佐藤裕子フェリス女学院大学名誉教授は聖書協会共同訳では旧約聖書、日本語、編集を担当された。「芥川龍之介と明治元訳聖書」という演題で、近代日本の文化形成と文学者に聖書が与えた影響について画像を用いて論じられた。

芥川の蔵書には2つの聖書（The New Testamentと明治元訳聖書）がある。旧制高等学校時代の校長・新渡戸稲造の影響があると思われる。明治の文豪・森 鴎外の蔵書にも聖書はあり、大正改訳のパイロット版である『マコ伝福音書』が含まれている。しかし大正改訳版はない。芥川の蔵書には見つからない大

正改訳聖書がある。その存在は室賀文武宛芥川の書簡で確認できる。室賀は内村鑑三の弟子である。鷗外も夏目漱石も大正改訳聖書は蔵書に見当たらない。つまり明治元訳、大正改訳両方の聖書を所持していたのは芥川のみということになる。

芥川のキリスト教をテーマとした作品は13年間で21作品に及び、4つの時期に分けることが出来る。ただし、芥川がキリスト教をテーマとして作品を発表したのは1916年から1924年に集中しており、大正改訳聖書を得たのが1926年3月のことなので、その影響を指摘するのは難しい。

「齒車」に日本聖書協会と室賀が登場する。この中に信仰についての問答が描かれている。文学は読者に読まれてこそ価値がある。読者論の先駆けといえる。日本近代文学館所蔵の芥川資料『明治元訳聖書』と『馬太傳福音書』には傍線が引かれている箇所がある。

芥川はどのようにキリスト教を描いたのかを、いくつかの作品から考察する。キリスト教のとらえ方に変化がみられる。純粹に文学のテーマとしていた時期からやがて哲学として理解するようになっていった。漱石によれば、感覚が文学になるという。そこから聖書・キリスト教は世界を理解するためのツールとして使われるようになったのではないか。

「西方の人」「続西方の人」の見出しから見えてくるものは、因果関係を再構築することによってそれが物語になるということである。

14時30分から10分間の休憩をはさんで、14時40分から対談が行なわれた。進行・聞き手の藏中先生、話し手・佐藤先生、大澤先生が壇上に並び、まず先ほどの講演についてそれぞれコメントした。

大澤先生からは佐藤先生の話の中にあつた文豪の蔵書中、芥川のみ両訳を持っていた点に触れ、傍線がマタイによる福音書のみ振られていること、また山上の垂訓にも傍線があるが作品には取り上げられていないことについて問いが投げかけられた。マタイにのみ線があることに関して覚書は残されていない。最初の福音書だからではないか。また山上の垂訓についても単に好きな箇所ということだったかもしれない、と佐藤先生の回答があつた。

佐藤先生は大澤先生の講演について「視よ」の訳出は時代にマッチした日本語の表れではないかとの感想を述べられた。

続いてフロアから事前に回収していた質問についての質疑応答の時間となった。

「視よ」が明治元訳に訳出されなかった理由についての質問に大澤先生は、当時の日本語担当者は漢訳聖書を参考にした。ギリシャ語聖書からの直訳ではないので、漢訳の影響が大きい。訳出は新約聖書から始められたが、もともと新約では訳出率が低かった。それが原因ではないかと思われる、と回答された。

佐藤先生への質問は、芥川にとって聖書とは、と芥川の自殺と聖書の関係は、の2つ。佐藤先生は次のように回答された。残された作品からしか作家を知ることにはできないが、芥川にとって聖書は小説の材料に過ぎないというわけではなく、世界を見るための知識として必要だったと思われる。そして芥川の自殺との因果関係はわからない。キリスト教では自殺はご法度、単なる好奇心のみではなく、救いを見たということはあると思うが。

今回の講演会を通して、聖書を読むことの意義を改めて考える機会となればと思う。

時間の制約ため寄せられたすべての質問について質疑応答を行なうことはできなかったが、限られた時間の中で、非常に濃い文学談義を伺うことができた。

15時から藏中先生による図書館展示の説明があった。今回の講演会のために1日限定で展示されている日本聖書協会所蔵資料3点のうち、特に注目すべきものとしてギュッツラフ訳『約翰福音之傳』がまず紹介された。現存する元版4冊（聖書協会、同志社、天理大学所蔵）のうちの1冊であり、まとまった最初の日本語訳聖書である。松山資料の『聖書改訳諸ひかへ』は大正改訳の際の備忘録である。

神戸女学院図書館所蔵松山資料からは『旅日記』(38)『聖書譯語例』(40)『ルカ伝福音書』『改訳馬可傳』『マタイ伝福音書』を展示している。『旅日記』は松山自身による旅行記録の抜粋であるが、後半にはそれ以外の記述もある。『聖書譯語例』は英語翻訳の実例が記されているが、後半部分は明治元訳の備忘録と

なっている。これら2点は神戸女学院創立150周年記念展示IIIの通常展示品である（カッコ内数字はカタログ番号）。これ以外は今回1日限りの限定展示である。『ルカ伝福音書』には松山の学びの痕跡が見られる。『改訳馬可傳』は原稿、校正刷、『マタイ伝福音書』は大正改訳の草稿、校正原稿である。このほか、聖書関係では、宣教師の日本語教師であった市川榮之助が筆写した聖書『約翰傳福音書』(32)のレプリカを展示している。

15時25分になり、飯先生から閉会の挨拶があった。150年という歳月は、単純に数字を数え、月日を重ねただけではない。新たな命を吹き込んでいく営みである。今回、展示では「財産」を公開している。先人の信仰を掘り起こして会を開いたことは、いたずらに擬人化するわけではないが、神戸女学院も喜んでいることと思う。

閉会后、参加者は三々五々に展示見学のため図書館本館へと移動した。特別展示エリアには人だかりができていた。普段目にするのできない資料を見るまたとない機会を得て、熱心に見入っている光景は、これらの資料の持つ価値を改めて認識するに充分であった。16時15分に一部の参加者は図書館職員のご案内でソールチャペル、総務館の見学に出発し、閲覧室に残っている人はまばらになったが、16時30分の展示終了まで人影が絶えることはなかった。

記念講演会の参加者は一般の方、教会関係者、日本聖書協会関係者、神戸女学院関係者を合わせて70名であった。この講演会がキリスト教信仰の歩みを振り返り、聖書という形あるものを通して形ないものへ思いを馳せる機会となったことは、創立150周年を記念するにふさわしいものであったと思う。小規模ではあったが、神戸女学院でこのような会が持てたことは関係者一同喜びとするところである。

## 神戸女学院創立 150 周年記念 めぐみ寄付講座(大学)・めぐみ寄付講演会(中高部)

神戸女学院創立 150 周年を記念して神戸女学院めぐみ会は学院に教育振興寄付を行なうため「神戸女学院創立 150 周年記念めぐみ会寄付」を募り、2024 年 2 月の「創立 150 周年記念募金事業」に 1 億円を寄付することが決定した。それに加えて大学と中高部それぞれにめぐみ寄付講座、めぐみ寄付講演会(以下、寄付講座、寄付講演会)を設定したいとの意向を示した。それを受けて学院は 150 周年事務局会議と学院常務委員会に諮り、寄付講座・寄付講演会を創立 150 周年記念事業として行なうことを決定した。

大学では 2025 年度前期に寄付講座を開講し、中高部は 2025 年度中に寄付講演会を開催することになった。

大学の寄付講座は以下の通りである。

講座名：神戸女学院創立 150 周年記念めぐみ寄付講座「リベラルアーツへの招待」  
全学オープン課目(全 8 回、1 単位)、定員 100 名。

「リベラルアーツへの招待」をテーマに各分野で活躍する方々を講師に迎え、学生の教養と知見を深める機会を提供。

(定員は 100 名であったが、申し込みが殺到して、260 名が受講した。)

開講日：月曜日 5 限(16:40~18:10) 但し 5 月 31 日と 6 月 10 日を除く。

対象は本学在学学生ではあるが、各回、大学教職員の希望者は聴講可能。

第 1 回 2025 年 4 月 21 日 岡崎成子氏(文学部英文学科卒業)  
株式会社フジシールインターナショナル取締役代表執行役社長 CEO  
「包んで〈価値〉を」

第 2 回 2025 年 4 月 28 日 西田公昭氏  
立正大学心理学部対人・社会心理学科教授  
「心が操られ、支配されるとき」

- 第3回 2025年5月19日 武内陶子氏(文学部総合文化学科卒業)  
フリーアナウンサー (元NHKアナウンサー)  
「冒険のススメ～武内陶子的生き方」
- 第4回 2025年5月31日 恒川久美氏(文学部英文学科卒業)  
株式会社ANA総合研究所産学連携部主席研究員  
「航空業界ってワクワクする Peach客室部創業に必要な発想の転換」
- 第5回 2025年6月10日 葉加瀬太郎氏with西村由紀江氏、柏木広樹氏  
ヴァイオリニスト  
「NH&K TRIOコンサート」
- 第6回 2025年6月30日 山極壽一氏  
総合地球環境学研究所所長  
「人類の進化と歴史を振り返って これからの学びを考える」
- 第7回 2025年7月7日 T氏(文学部英文学科卒業)  
警察官(大阪府、現警察庁)  
「卒業から30年を経て」
- 第8回 2025年7月28日 三島有紀子氏(文学部総合文化学科卒業)  
(6月23日から日程変更) 映画監督  
ナビゲーター 古田涼子氏(文学部英文学科卒業)  
毎日放送プロデューサー  
「あなたの思う美しいもの」

中高部の寄付講演会は以下の通りである。

- 2025年6月18日 佐野ほづみ氏(高等学部卒業) 皮膚科医  
「まだまだ続く土佐の皮膚科医」  
(めぐみ会主催150周年記念講演会)  
長年にわたる地域医療にかかわられた経験を含めての話を  
お願いした。

- 2025年7月8日 高島峻輔氏 芦屋市長  
「主体的に学びを、人生をデザインする」  
(キャリアガイダンスIーめぐみ会主催150周年記念講演会ー)  
「Bridging Generations 未来を生きる人たちのために」を  
テーマに未来への架け橋を築いている方に話をお願いした。
- 2025年7月10日 金原瑞人氏 翻訳家・法政大学名誉教授  
「2025年度読書講演会」  
(中高部図書室・国語科共催 めぐみ会主催150周年記念講演会)  
読書講演会は1998年から国語科と中高部図書室共催でこれ  
まで4回開催されており、今回は12年ぶりの開催である。
- 2025年7月11日 竹内和雄氏 兵庫県立大学環境人間学部教授  
「スマホ時代の子どもたちのために」  
(神戸女学院創立150周年めぐみ寄付講演会 2025年度生活指導課講演会)  
ネットの知識と課題についての話をお願いした。
- 2026年3月16日 津川恵理氏(高等学部卒業) ALTEMY代表 建築・環境デザイン担当  
「身体と世界をつなぐ建築」

\* 寄付講座、寄付講演会については『めぐみ』第115号(2026年5月発行)、『学報』第200号  
別冊(2026年3月発行)に掲載あり。

## 神戸女学院創立 150 周年特別記念礼拝

神戸女学院創立 150 周年を記念して特別礼拝が持たれることになった。チャプレン会において学院標語「愛神愛隣」にふさわしい講話をしていただける講師を招きたいということが話し合われ、沢 知恵氏にお願いすることが決まった。

2025 年 10 月 14 日（火）、8 時 30 分から中高生のために、10 時 25 分から大学生のために、エミリー・ホワイト・スミス記念講堂において学生・生徒・教職員のための特別記念礼拝が行なわれた。講演の内容は中高部、大学で全く同じであったので、大学礼拝の内容を以下に記録する。

歌手でハンセン病療養所の音楽文化研究者である沢 知恵氏を講師に迎えて「かかわらなければ」と題する講演があった。

まず開会に当たり中野敬一学長・学院チャプレンからアナウンスがあった。神戸女学院は 10 月 12 日に創立 150 周年を迎え、新たな歩みを確認した。今日は中高部・大学共に特別の礼拝を守る。愛神愛隣を心に留め、礼拝を守ってほしい。

講演の前に礼拝を守った。讚美歌 430 番、聖書の箇所はローマの信徒への手紙 12 章 15 節である。司会の大澤 香大学チャプレンは祈禱で、2 人の宣教師から始まり、愛神愛隣のもと卒業生を社会に送り出す使命を担ってきた神戸女学院は創立以来の礼拝を通して自らを問い直し、隣人を愛する人となるように教育を続けている。愛することの大切さを再確認できますようにと締めくくられた。講師の紹介の後講演に移った。

沢氏はまずお祝いを兼ねてアカペラで 1 曲披露して下さった。3 つのことば（日本語、英語、韓国語）で Amazing Grace を。心揺さぶる歌声が朗々と講堂

内に響き渡った。一同じっと耳を澄まして歌に聞き入っていた。ヴォーリズ建築は響きが良いと沢氏は言う。音楽家として素朴で暖かい音がすると再認識した、と。活動の拠点としている大島青松園の教会も 1935 年建築のヴォーリズ建築である。

ここで大島青松園に 13 歳から 70 年間居た塔 和子（とうかずこ）さんの詩「胸の泉」を朗読された。本講演のタイトルにもなっている「かかわらなければ」という一節を引いて参会者に問いかける。かかわることは好きですか。（肯定の拍手多数）では、かかわることは得意ですか。（拍手はまばら、明らかに減少）かかわることは苦にならないが、自信がない、それが本音であるということを示し、自分も一人になるといろいろ考えこんでしまったりすると打ち明ける。悩みの大半は人とのかかわりから生ずる。人は弱い生き物である。人とかかわるといことは豊かなことである反面、しんどい、不幸なことでもある。塔さんも「何億の人がいようとも、かかわらなければ路傍の人」としっかり言っている。

ここで塔さんの人生を紹介し、ハンセン病のため名前を変えたことに触れ、名前を変えるということはいなかったことにされるということであると語った。塔さんも自分が自分でなくなったような気がしたが、その後キリスト教と出会って、キリスト者となり、言葉にすることによって世の中や人と関わりたいと思うようになった。詩は生命であり、本質から湧く言葉を紡いでいる。沢氏は本物のことばを求めて聖書や詩を読んだという。沢氏のお父様は牧師で、ご両親は国際結婚、ハンセン病の人々とかかわりを持ち続けた。1971 年夏、生後数か月で大島青松園に行った。大歓迎されたが、園の人々は病とその偏見故に子供にふれることができない、身体が動かなかったという。大人になって再訪した時、園の人々は自分のことを覚えていてくれた。それ以来、青松園は待っていてくれる人々の居る大切な場所になった。

「生きることは感謝すること」、2001 年からコンサートを始めた。2014 年に岡山に移住しその翌年大島青松園の教会がその歴史を閉じた。しかし 2016 年から週一回教会に通い、門戸を開いている。ハンセン病の人々とかかわる中で、各教会に音楽（園歌）があることを知った。そこでハンセン病教会の音楽文化を

記録し、修士論文にまとめた。園歌を共に声をあわせて歌うことで連帯感を育んでいた。戦後 80 年、だんだん人はいなくなる。彼らには 2 世、3 世はいない。この人々の生きた証を残すことが自分の使命だと思い、楽しみながら戦っていきたい。生後 6 か月で大島青松園に行ったことは運命であり、この運命が使命になった。使命とは与えられた Mission である。時間をかけてあなただけの Mission を見つけてほしい。無駄なことは一つもない。神戸女学院の永久標語「愛神愛隣」は変わることはない言葉である。中野先生の学校紹介のことばの中にも「隣人を愛するということは隣人にかかわること」という一節がある。生きることはかかわること、適切な距離を保つことこそが真の接近である。希望をもって、勇気をもってかかわってほしい。神のかかわりこそ神の愛である。共に喜び、泣いて、愛を実践してほしい。最後に塔さんの詩「選ぶこと」を朗読して講演は終了した。

ロビーでは沢氏の CD や著書の販売があった。

\* 大学、中高部記念礼拝については『学報』第 200 号別冊（2026 年 3 月発行）に記事の掲載あり。

神戸女学院創立 150 周年記念めぐみ講演会

## 森山良子コンサート

神戸女学院創立 150 周年を記念して、神戸女学院の同窓会である公益社団法人神戸女学院めぐみ会は記念講演会として「森山良子コンサート」を開催した。

2025 年 10 月 18 日、16 時からエミリー・ホワイト・スミス記念講堂に歌手・森山良子氏を迎えて、神戸女学院創立 150 周年記念めぐみ講演会が行なわれた。透明感のある歌声と歌唱力でデビュー以来 50 年以上にわたって数々のヒット曲を生み出しているトップシンガーである森山氏。めぐみ会の講演のお知らせに「神戸女学院でオルガンを学ばれたお祖母様の心は、ジャズトランペッターのお父様へ、そして森山良子さんへと受け継がれています。」とあるように、森山氏のお祖母様が神戸女学院の同窓生であるというご縁もあって、神戸女学院でのコンサートが開催されることになったのである。

お祖母様のことを学院に残る資料から辿ってみると…。

お祖母様の名前は狭間 撫（レキ）。1905 年 12 月、神戸女学院に入学、1907 年 4 月退学。在学中、英語と音楽（歌と器楽）を学んで、第 26 回音楽部オルガン科（1909 年 3 月卒）の同期生となっている。神戸女学院に音楽部ができたのは 1906 年であるから、音楽部オルガン科の 1 期生と共に学んでいたということになる。ちなみに音楽部ピアノ科 1 期生は建築家ウイリアム・メレル・ヴォーリズ氏夫人、一柳満喜子氏（1908 年 3 月卒）である。

撫さんが入学したころ神戸女学院は神戸山本通にあり、音楽教育専用の校舎・音楽館を持っており、西日本で音楽が学べる唯一の学校であった。小倉出身の撫さんは寄宿舎で生活し、神戸教会に通い、1907 年 3 月、神戸教会で洗礼を受け、クリスチャンとなった。

郷土史家によると、撫さんの実家・狭間家はその地方では唯一西洋楽器を持ち、それを演奏しているような近代的で開かれた家だったという。夫となる森山写真館の森山三郎氏との婚約を機に地元の高等女学校を退学し、神戸女学院に入学した。婚約者は撫さんと婚約後すぐにアメリカに渡る。オルガンを専攻

したのは、結婚後アメリカに行くことが決まっていたため、クリスチャンであった夫の所属する教会でオルガニストとして奉仕するつもりであったのかもしれない。結婚のため神戸女学院を退学し、アメリカに渡り結婚、サンフランシスコの日本人メソジスト教会でオルガニストを務めた。

撫さんは卒業はしていないが、神戸女学院とのつながりを大切にされ、同窓会加州支部（現・北カリフォルニア支部）の活動に積極的に参加し、留学生の世話をしてくれたと記録にある。「母校留学生にして桑港上陸の者を母となり慰め下さる感謝に不堪」（1921年8月2日発行『めぐみ』第1号51-52ページ）

森山 撫さんのものがたりはNHKファミリーヒストリーで取り上げられ、2016年2月5日テレビ放送されたので、ご記憶の方もいらっしゃるだろう。

ちなみに、森山良子氏ご本人と神戸女学院との関係についても調べてみると、1967年に神戸女学院で演奏をしていたことが分かった。「神戸女学院大学新聞」によると、1967年度神戸女学院大学祭にゲストとして招かれていたのである。

「森山良子とフォークソングを歌おう」という広告が出ている（1967年5月10日発行第99号1面）。大学祭後夜祭に出演された。「大学祭最後を飾る後夜祭は、三日の午後四時～八時校庭で開かれる。後夜祭の呼び物は何ととっても、森山良子、タイニー・スパロウズほかによるフォークソングであろう。ゲスト演奏のほか歌唱指導も行なわれ、フォークダンス、クイズ、福引きなど楽しいプログラムが盛り込まれている。」（1967年5月31日発行第100号2面「最後を飾るフォークの夕べ」）

かつて校庭の芝生で、森山良子氏の歌声を聞いたという方が、今回の講演会にも参加しておられたようである。

\*めぐみ講演会については『めぐみ』第115号（2026年5月発行）、『学報』第200号別冊（2026年3月発行）に掲載あり。

## 神戸女学院創立 150 周年記念募金事業

2025 年に創立 150 周年を迎えるにあたって 2023 年、「2025 年神戸女学院創立 150 周年記念募金のご案内」が出された。そこには創立 150 周年記念募金事業としてキャンパス再整備が掲げられ、具体的には 4 つの事業計画が記されていた。

### ① 正門及び門衛舎の改修（重要文化財の保存・活用）

耐震性能に問題がある正門及び門衛舎の解体修理を、文化庁の補助事業として 2022 年度から 3 か年計画で行います。(9 ページ)

### ② 桜並木の復元

岡田山移転後に新植された桜のうち、経年により樹勢に衰えが目立つソメイヨシノの捕植を進め、美しい桜並木の維持を図ります。(8 ページ)

### ③ 新棟建設、西門からの歩車分離

西門上に建つ理学館別館の建替えを行い、新棟には新学部に必要な機能を持たせながら、西門からの高低差の解消、歩車分離、理学館・社交館周りの修景などの整備を行います。(8 ページ)

### ④ 葆光館の改修（重要文化財の保存・活用）

葆光館 3 階のバリアフリー化を目指し、エレベータ設備のあるタルカット記念館 3 階からのアクセスが可能となるよう渡り廊下を増築します。(9 ページ)

葆光館の改修は、2021 年度から 2025 年度の中期計画の一環として行なわれた。2023 年度から中学部は 35 人 4 クラス制に移行した。4 クラス化に伴って葆光館の 3 階を教室に改修し、教室となった葆光館 3 階西側をタルカット記念館と渡り廊下でつなぐことによってバリアフリー化を図るという計画であり、2023 年度にこの事業は完了した（2023 年度事業報告書 10 ページ参照）。

岡田山キャンパスの桜はキャンパス移転時に同窓生によって寄贈された記念

樹であった。キャンパス植生の記録集『岡田山の自然 六甲東麓の生物とその生態』（岡田山の自然編集委員会、1974年）によれば、ソメイヨシノを主とする苗木150本が同窓生3姉妹によって1934年に寄贈され、さらに他の同窓生によって500株が寄贈され、音楽館前をはじめ校庭各所に植えられた。これらのうち運動場西側、寮附近、藤棚横、中高部3号館（現存せず、現在はアンジー・クルー記念館がある）北のものが最もよく成長し、他のものは衰弱あるいは枯死したものが多かったという（31ページ）。この本には総数約1469株、164件の記念樹が記されており、桜もその一つに数えられている。

キャンパス移転80周年の頃に出された記念樹をまとめた本によると、神戸女学院は「桜の園」と言われるほど桜の本数が多いが、40年ほど前はそれ程ではなく、中高部卒業生からの寄贈、大学・学院組合からの寄贈、建物が新築されるたびに周りに桜を植えていった結果、今のようにならざるを得ない状況になった。この当時、周辺の自生種と半枯死木を除いてもキャンパス全体で310本ほどの桜があったという（大川徹「記念樹いまむかし 神戸女学院岡田山キャンパスの記念樹たち」『神戸女学院（中高部）紀要』Vol.13、神戸女学院中高部、2012年3月、2ページ）。

桜並木の復元は2025年2月3日植樹式が行なわれ、正門、音楽館前ロータリー、文学館前、グラウンドなどに約40本の桜が植えられた。その際、樹形や寿命の観点から植栽を見送った箇所が数か所あったが、その場所にも2026年になってからソメイヨシノが植樹された。

「記念樹は勿論のこと、現在の岡田山をつつむ植物たちを愛し、保護して、更に今後来る神戸女学院150周年、200周年迄にもわたって、この自然環境が保全されることを願ってやみません。」（『岡田山の自然』はしがきより）

「生徒・学生、教職員、同窓生、来校者、みんなが楽しめる『桜の園』、記念樹いっぱいのキャンパスが未来永劫、末永く続くことを期待してまえがきます。」（「記念樹いまむかし」2ページ）

正門・門衛舎の改修については、2014年に重要文化財に指定されたキャンパスの保存活用計画に沿って進められている。2020年度に「重要文化財神戸女学

院保存活用計画」改定版が文化審議会において認定され（2020年度事業報告書13ページ）、2022年度から四カ年計画の文化庁補助事業によって行なわれている。2022年度は基礎と地盤の調査等を行ない、2023年度に解体格納工事を実施した。2024年度は地盤改良、耐震補強、古材の木繕いなどの組立工事を行なった。2025年度は補助事業の最終年度に当たり、組立工事及び活用のための工事に移った。創立150周年記念式典当日（10月12日）には工事用足場は取り払われ、門衛舎の内側の工事が行なわれているようであった。2026年2月完成した。

新棟建設については別掲「小林季子記念館」参照。また、150周年事務局の行なった事業については北條敦子氏の前掲原稿参照。

\* 記念募金事業については『学報』第199号（2024年7月11日発行）、第200号（2025年7月11日発行）、第200号別冊（2026年3月発行）、『めぐみ』第112号（2023年5月発行）、第114号（2025年5月発行）に記事の掲載あり。150周年事務教主催事業については『学報』第190号（2020年12月18日発行）、第191号（2021年3月16日発行）、第194号（2022年3月16日発行）、第196号（2022年12月20日発行）、第198号（2023年7月13日発行）、第199号（2024年7月11日発行）、第200号（2025年7月10日発行）、第200号別冊（2026年3月発行）、『めぐみ』第114号（2025年5月発行）に記事の掲載あり。

## 小林季子記念館

新校舎についての概要が公にされたのは2023年9月のことであった。ホルブルック記念館完成（2013年）後、大学校舎の更新に関して要望が出されており、2019年度から本格的に検討が始まった。2020年秋にはキャンパス再整備マスタープランが策定されたが、諸般の事情によりその実施は凍結された。2022年秋に改めて検討を行ない、心理学部設置を踏まえて必要となる施設等の整備を行なうために理学館別館の建て替えを中心とする「理学館西側地域再整備計画」を議論し、2023年3月の理事会で基本計画が承認された。

この計画に従って2023年12月から理学館別館の解体に伴う事前工事が始まり、2024年7月に解体が完了した。新棟の名称は故・小林季子氏（高等女学部第49回卒業）からご遺贈いただいた志を次世代に橋渡しし、永く顕彰するため、「小林季子記念館」とすることに決まった。

小林季子氏、旧姓・安井季子氏は高等女学部では熱心に自治会活動に参加していた様子が窺える。共励会の祈禱部のリーダー（1929年7月発行『めぐみ』第14号）や自治会の書記（1931年7月発行『めぐみ』第18号）を務めたということが記録に残っている。そして卒業式では卒業生総代として挨拶をした（1932年7月発行『めぐみ』第20号）。卒業後は東京の津田英学塾（現・津田塾大学）に進学している。

2024年7月29日（月）13時30分からソールチャペルにおいて小林季子記念館起工式の礼拝が行なわれた。追中宏美氏によるオルガンの前奏に続いて、一同で讃美歌第361番を唱和し、司会の中野敬一学院チャプレンによって聖書（詩編127編1節）が朗読された。

飯 謙理事長・院長は、この度の新校舎建築と一緒に喜びたいと来賓、出席者に向かって挨拶された。キャンパス再整備は2019年から始まったものである。今回の新校舎は、ここに至るまでに二転三転したが、150周年に向けてのマスタープランの端緒を開く計画となる。小林季子氏、八代みゆき先生をはじめ、計画に参画してくれた方々に感謝している。

中野先生によって、ここに至るまでの神の支えと導きに対する感謝と、さまざまな新たな場が備えられる記念館の工事の成功を願って、祈りが捧げられた。

ソールチャペルの扉の外の廊下には、新館のいくつかのイメージ図と完成予想模型が飾られ、それを目にしながらい同は建築予定地へと移動した。

13時45分から鍬入れが行なわれた。猛暑でうだるような暑さにもかかわらず、テントの外で待ち構える参加者が見守る中、学院を代表して飯先生、日建設計を代表して大谷弘明氏、竹中工務店を代表して坪井昌行氏が順に、「エイ」という掛け声とともに3度ずつ鍬を入れた。

最後に中野先生の祝禱をもって起工式は終了した。

出席者は学院関係者（教職員、めぐみ会会長・副会長）、設計を担う日建設計（5名）、工事を担当する竹中工務店（6名）合わせて約40名であった。

小林季子記念館は2026年3月完成し、3月24日に中野先生の司式によりソールチャペルで献堂式が行なわれた。そのあと場所を現地に移してテープカットを行ない記念館は開館となった。岸本真司学院事務局次長の司会で定礎式を行ない、引き続き、学生ロビーとなる「めぐみ commons」のプレートの除幕式があった。

記念館は地上1階、地下2階の3層構造となっており、地下の2層は心理相談室と心理学実験室となる。建物のあちらこちらに工夫が凝らされており、旧小林季子邸のガラスの欄間、旧寄宿舍のテーブル、ヴォーリズ校舎に使われているスクラッチタイル、古瓦を利用して神戸女学院150年の歴史を継承しようとの思いを感じる。理学館側入口のファサードは講堂横のパーゴラをイメージして設計されたとのことで、将来同じように植物に覆われ、自然と一体となったキャンパスの一部になるようにとの願いが込められている。

\* 記念建築については『学報』第199号（2024年7月11日発行）、第200号（2025年7月10日発行）、第200号別冊（2026年3月発行）、『めぐみ』第112号（2023年5月発行）、第114号（2025年5月発行）に記事の掲載あり。献堂式については『学院史料』次号掲載予定。

## 150 周年記念出版

神戸女学院では折にふれて歴史を記録に留めてきた。記念出版もその一環である。年史の発行は記念出版の中でも大きな位置を占める。

単行本となった神戸女学院史の最古のものは『創立二十五年神戸女学院略史』で 1900 年出版である。神戸女学院は 125 年に及ぶ学院史出版の歴史を有している。

その後 40 年、50 年と出版され、1950 年、第 5 代院長シャーロット・B. デフォレスト先生 (Miss Charlotte Burgis DeForest) によって英文 75 年史である *The History of Kobe College* が刊行された。この本は先生が在米中に入手したアメリカンボード側の資料を用いた本格的な歴史書である。現場の教員・宣教師としての経験が随所に生かされている。その 5 年後に書かれた日本語による 80 年史は、75 年史を踏まえて歴史学者が学究的視点で執筆している学院史である。そしてこの 2 冊の歴史書をベースに編纂された学院史が『神戸女学院百年史総説』『同 各論』であった。通史編に当たる総説、論文集である各論の 2 冊は、各方面の専門家が執筆に当たり、現在でも神戸女学院史の正史として最も基本的な文献として読み継がれている。2000 年に創立 125 周年を迎えた際には、簡単な読み物として『神戸女学院の 125 年』が発行されたが、それ以降、学院史は編纂されておらず、創立 150 周年を迎えるにあたり 150 年史の発行が決定した。

150 年の歩みを本として残すことは早くから話題に上っていたが、正式に委員会（年史編纂委員会）が発足したのは 2016 年である。『神戸女学院百年史』に並ぶ 150 年史を出版すべく、委員会においてさまざまな検討が行なわれてきた。150 年史は 100 年史に続く 50 年を中心に記述することとし、創立 150 周年記念式典までカバーすることとしたので、発行は 2026 年以降になると見込んだ。

そこで委員会では、2021 年に正史とは別に生徒・学生が手軽に読める神戸女学院史のコンパクト版を出版したいとの提案を受け、検討の結果、A5 版 96 ペ

ージのコンパクト版 150 年史を年史編纂委員会監修で発行することを決めた。その後、2024 年 9 月開催の委員会において創立 150 周年記念式典のお土産としても使われることが決まった。

コンパクト版 150 年史『Kobe College Historical Sketch—神戸女学院の 150 年—』は『神戸女学院百年史 総説』をもとに再編成し、こののち刊行される 150 年正史『神戸女学院 150 年史 (仮)』の手引書的なものとなるように工夫している。歴史参考書をイメージして、各トピックスは見開き 2 ページで完結するように編集している。

2025 年 3 月 27 日発行、創立 150 周年記念式典に先立って、生徒・学生・教職員に配布された。2025 年 10 月 12 日、式典当日には式典出席者へのお土産として多くの人々の手に渡った。

コンパクト版と並行して進められている正史の編纂活動は、途中、新型コロナウイルス感染症の影響を少なからず受けることとなったが、コロナ禍明けから本格的に執筆作業を開始した。執筆は年史編纂委員会委員を中心に在職中の関係教職員による分担執筆という方式を採った。創立 100 年までは 100 年史を基本に記述し、100 年以降は 101 年からの 50 年を概観して、続いて法人、大学、中高部、他関係機関に分けて記述するという構成となる。

現在原稿は 8 割がた集まっており、月 1 回のペースで編集会議が持たれている。当初の予定では 2026 年度中に発行ということになっていたが、諸般の事情により 2028 年度発行を目指して作業が進んでいる。

\* 記念出版については『学報』第 200 号別冊 (2026 年 3 月発行)、『めぐみ』第 114 号 (2025 年 5 月発行)、『学院史料』第 30 号 (2017 年 3 月発行)、第 32 号 (2019 年 3 月発行)、第 33 号 (2020 年 3 月発行)、第 35 号 (2022 年 4 月発行)、第 37 号 (2024 年 4 月発行) に記事の掲載あり。

---

『学院史料』第 39 号

2026 年 4 月 1 日発行

編集 史料室専門委員会

発行 神戸女学院史料室

〒662-8505 西宮市岡田山 4-1

---

# GAKUIN SHIRYO

2026. 4. Vol. 39.